

# 高畠遺跡 17次

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第676集



2 0 0 1

福岡市教育委員会

外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書 11

# 高 煙 遺 跡 1 7 次

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第676集



調査番号 9833  
遺跡略号 TKB-17

2 0 0 1

福岡市教育委員会

## 序

福岡外環状道路は、福岡市西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原までの都市計画道路で、延長26.4kmをいいます。本道路は福岡市西南部交通対策の鍵を握る幹線道路で、早急な供用が望まれており、現在、姪浜と野芥間、月隈と志免町間など一部の供用が開始されております。

今回報告する高畠遺跡は、福岡外環状道路の月隈と箕原間に所在し、道路建設工事に先だって発掘調査を実施いたしました。

高畠遺跡第17次調査では、弥生時代の土坑のほか、余良時代から平安時代前期の大溝、中世の川と水田などが発見され、多大な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査に際し、建設省福岡国道工事事務所の関係者および地元の方々をはじめ発掘調査から整理・報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表するとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っております。

平成13年2月28日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

## 例　　言

1. 本章は、共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した高畠遺跡第17次調査（福岡市博多区板付6丁目地内）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大濱奈緒、佐藤信、大庭が作成した。また、製図には、大庭があたった。
4. 本章の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準にしている。
5. 本章に使用した遺物実測図は、井上涼子・大濱奈緒・上塘貴代子・大庭康時が作成し、森本・井上・大濱・大庭が製図した。
6. 本章で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。
7. 本調査にかかる遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
8. 本書にかかる遺物および記録類の整理には、今井民代・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・上塘貴代子・森若知子があたった。
9. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9833	遺　跡　略　号	TKB-17
調査地地番	博多区板付6丁目地内	分布地図番号	板付24
開発面積	5500m <sup>2</sup>	調　査　面　積	2063.5m <sup>2</sup>
調　査　期　間	1998年9月1日～1999年3月26日		

## 本文目次

第一章 はじめに	1
1. 発掘調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
4. 高畠遺跡の既往の発掘調査	4
第二章 発掘調査の記録	7
1. 発掘調査の方法	7
2. 発掘調査の経過	8
3. 遺構と遺物	10
(1) 第1区	10
A. 包含層上層水田	12
B. 丘陵裾部	12
C. 包含層下遺構面	14
D. 大溝	14
E. 土坑	37
40号遺構	37
41号遺構	37
43号遺構	38
44号遺構	38
F. 包含層出土遺物	40
(2) 第2区	45
(3) 第3区	48
(4) 第4区	51
(5) 盛り土内出土墓石	56
第三章 まとめ	57

# 第一章 はじめに

## 1. 発掘調査にいたる経過

福岡外環状道路は、昭和44年に都市計画決定された井尻粕屋線・井尻姪浜線の総称で、西区姪浜から糟屋郡粕屋町戸原間の延長26.4kmの都市計画道路である。

福岡市では、平成7年度に大学生の世界的なスポーツの祭典であるユニバーシアード福岡大会を開催した。それに関連して、都市基盤整備の一端として、福岡都市環状道路建設が具体化したのである。

平成元年～3年に建設省福岡国道事務所より、外環状道路予定路線内の埋蔵文化財に関する事前審査願いが、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。これを受け、埋蔵文化財課では、東側からI～IV工区とされた各工区で、用地買収が終了した部分から隨時試掘調査を実施した。その結果、試掘調査で埋蔵文化財が確認された各地点について国道事務所と協議を行い、建設省の費用負担で発掘調査を実施することとなった。

今回報告する高畠遺跡第17次調査地点は、餅田生産遺跡に含まれており、平成5年10月16日・23日に試掘調査を実施した。試掘調査では、水田遺構が遺存する可能性が指摘され、5500m<sup>2</sup>について発掘調査が必要であると判断された。なお、餅田生産遺跡は平成6年に版を改めた改訂版の福岡市文化財分布地図では、丙の台地上に想定されていた高畠遺跡に編入され、現在はこの遺跡名は使われていない。

発掘調査は、外環状道路の工事工程に合わせて調査地点を移しながら、平成3年から実施している。高畠遺跡17次調査地点については、平成10年度調査となり、平成10年9月1日に発掘調査に着手、平成11年3月26日に終了した。

## 2. 発掘調査の組織と構成

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田英俊（前任） 生田征生（現任）
調査総括	同 埋蔵文化財課	課長	柳田純孝（前任） 山崎純男（現任）
	同	第2係長	山口謙治（前任） 力武卓二（現任）
調査庶務	同	第1係 文化財整備課	谷口真由美（前任） 御手洗清（現任）
調査担当	同 埋蔵文化財課	第2係	大庭康時
調査補助	佐藤信 大濱菜緒		
調査作業	石川君子 井口正愛 江越初代 大久保学 大庭智子 折茂由利 清水明 関加代子 曾根崎昭子 都野浩之 永隈和代 長田嘉造 沼田昌信 能丸勢津子 野口ミヨ 早川浩 宮崎タマ子 村崎祐子 森垣隆視 山内恵 吉田清		

### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

高畠遺跡は、御笠川西岸の洪積台地ならびにその裾部分からなっている。台地部分は、かつては標高18mあまりをはかる中位段丘であったが、現在は12m前後にまで削平を受けている。1973年の第1次調査以来、2000年12月現在で18次の発掘調査が実施されている。11次調査と18次調査以外は、台地の縁辺部での調査であり、今回報告する17次調査も台地の東裾部にあたっている。17次調査に関連するこれまでの調査成果は次節に譲り、ここでは、周辺の埋蔵文化財の状況について概観しておく。

高畠遺跡のすぐ南側には、井相田C遺跡がある。井相田C遺跡では、奈良時代～平安時代の集落、鎌倉時代の上塙墓、室町時代の水田・池などが調査されている。特に第2次調査地点では、古代の新羅土器や石壺、墨書き器などが出土しており、公的施設の存在が推定されている。

大野城市にまたがる仲島遺跡は弥生時代中期前半から奈良時代・鎌倉時代にわたる複合遺跡である。注目すべき遺構・遺物が多く、貨幣（王莽錢）、後漢鏡片、青銅製鋤先、銅鑄、銅矛鋒型、滑石性模造品、人面墨書き土器などが出土している。

高畠遺跡の南の丘陵上には、麦野A遺跡が立地している。古代・中世の集落遺跡である。高畠遺跡の台地を北にとると、断続的に中位段丘が続き、学史的にも著名な遺跡群が展開していく。南から北にこれらを列記すれば、わが国で最初に水稻農耕が定着した環境集落・水田遺跡として知られる板付遺跡がある。国指定史跡であり、すでに整備を終えて、公開されている。甕棺墓群も伴っており、前期末の甕棺から細形銅劍・銅矛が出土しているほか、後期の豊穴住居跡からは埋納されたと考えられる小銅鐸が出土している。板付遺跡のすぐ西には、朝鮮系無文土器が多く出土した諸岡遺跡がある。ナイフ型石器を出す旧石器時代の遺跡でもある。板付遺跡の北には、水田遺跡である那珂君体遺跡をはさんで、那珂遺跡・比恵遺跡と続く。

那珂遺跡では、縄文時代晩期の二重環壕集落や弥生時代の環壕集落跡・甕棺墓群などが見つかっている。特に銅戈・銅劍の鋒型・鋒型中子の出土が示すように、弥生時代の青銅器生産拠点のひとつと言うことができる。古墳時代前期には、福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が築かれた。主体部は現在の社殿の下になっていて調査できていないが、第二主体部からは、三角縁神獸鏡が出土している。また、古墳時代後期の前方後円墳である東光寺剣塚古墳の横穴式石室には、阿蘇凝灰岩の石屋形が置かれている。これらの前方後円墳は、福岡市・春日市・那珂川町にまたがって点在する福岡平野の首長墓の系譜を構成するものである。

比恵遺跡は、弥生時代から中世に及ぶ複合遺跡である。弥生時代中期前半の甕棺墓から出土した銅劍に付着していた組織物は、日本最古の出土例とされる。青銅器の鋒型・取瓶も出土しており、青銅器生産が行われていたことはほぼ確実である。弥生時代の鉄器（特に鉄斧）の出土も卓越している。古墳時代後期では、大型の掘立柱建物群や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年（536）条に見える「那津宮家」との関連が想定され、保存が決定した。

高畠遺跡の南西、春日市の春日丘陵上には、いうまでもなく「奴国」の中心地である。「奴国」王墓とされる須玖岡本遺跡、青銅器工房とされる室町遺跡、鉄器工房の赤井手遺跡など貴重な成果を上げた遺跡は数多い。

このように高畠遺跡が位置する、御笠川と那珂川にはさまれた段丘地帯は、福岡平野でも有数の遺跡が並ぶ地域である。高畠遺跡の範囲内においても、大宰府から水城の東門を出て博多方面に直進する官道が通っており、古代において重要な位置を占めたことが予想される。



1. 高畠遺跡 A. 17次調査地点 2. 仲島遺跡 3. 麦野A遺跡 4. 麦野B遺跡  
5. 麦野C遺跡 6. 南八幡遺跡 7. 雜餉隈遺跡 8. 三筑遺跡 9. 篠原遺跡  
10. 井相田C遺跡 11. 諸岡A遺跡 12. 諸岡B遺跡 13. 板付遺跡 14. 那珂君林遺跡  
15. 那珂遠跡 16. 那珂八幡古墳 17. 比恵遺跡 18. 五十川高木遺跡 19. 井尻B遺跡  
20. 佐遺跡 21. 須玖遺跡群 22. 須玖唐梨遺跡 23. 須玖水田遺跡 24. 雀居遺跡

Fig.1 高畠遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

#### 4. 高畠遺跡の既往の発掘調査

前述したように、高畠遺跡では、2000年末段階で18地点の発掘調査が実施されている。そのすべてについて触れることはできないので、17次調査と内容的に関連のある2次・3次・8次・9次・10次調査地点からえられた成果について、総括的に述べることにする。

台地北縁部での4・7次調査では8~9世紀の溝、瓦磚が出土した土坑が検出されている。台地東縁部での8次調査では、木簡や大量の墨書き土器、瓦磚が出土した溝を検出した。木簡には凶作に伴う米の下限に関する記載や、「匁升」や「匁石」など穀物の数料をあらわしたもののがみられる。溝の埋没時期は、9世紀中葉~10世紀頃である。この溝は、北に直行して10次調査地点でほぼ直角に東に折れると推定されている。南には、第9次調査地点で「く」字型に緩く屈折し、2次調査地点の調査グリッドにのびていく。また、高畠遺跡が形成された台地は1940年頃に工場建設によって大きく削平されたが、その際多くの礎石とみられる大石が動かされたと伝えられる。

8次調査と10次調査を担当した柳沢一男は、旧地形の検討・溝出土遺物に瓦磚が多いこと、「寺」と記された墨書き土器が出土していることなどから、この溝が直進する部分を東辺とした方1町半程度の寺城を持つ古代寺院を想定し、「高畠庵寺」と呼んだ。

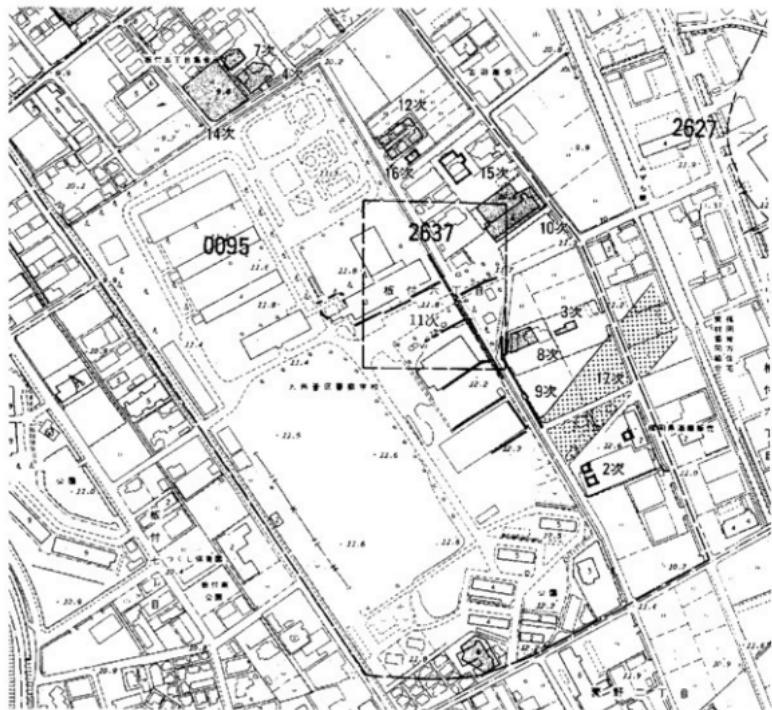


Fig.2 高畠遺跡発掘調査地点分布図 (1/4,000)

これに対し、14次調査を担当した佐藤一郎は、高畠遺跡の過去の調査成果を総括した中で、寺院の莊嚴に関する遺物が全く出土していないこと、寺院遺跡ではあまり出土しない舟形、鳥形、斎串、陽物形木製品などの木製祭祀遺物、人面墨書き上器が出土していることから、寺院遺跡としての確証はないと指摘した上で、徵稅に関する記載や郡名、鄉名がみられる文字史料から8世紀中葉から10世紀にかけての「那珂郡衙」とする見解を示した。那珂郡衙推定地としては、那珂遺跡群(博多区那珂)があげられるが、那珂遺跡群の発掘調査では8世紀前半に至るまでの正方位に主軸をとる溝、大型建物が検出されているが、8世紀中葉を下る時期のものは検出されていないことから、那珂遺跡群内に置かれていた郡衙が8世紀中葉に高畠遺跡内へ移転したのではないかという。

高畠遺跡の性格については、いまだ結論は出ていない。しかし、いずれにしても、高畠遺跡のこれまでの発掘調査からは、古代の地方拠点的、あるいは権力的な場であったことは明らかであると言える。

今回報告する17次調査地点は、8次調査地点・9次調査地点と2次調査地点との間に位置し、「高畠廃寺」の推定寺域からは南はずれた地点にあたっている。

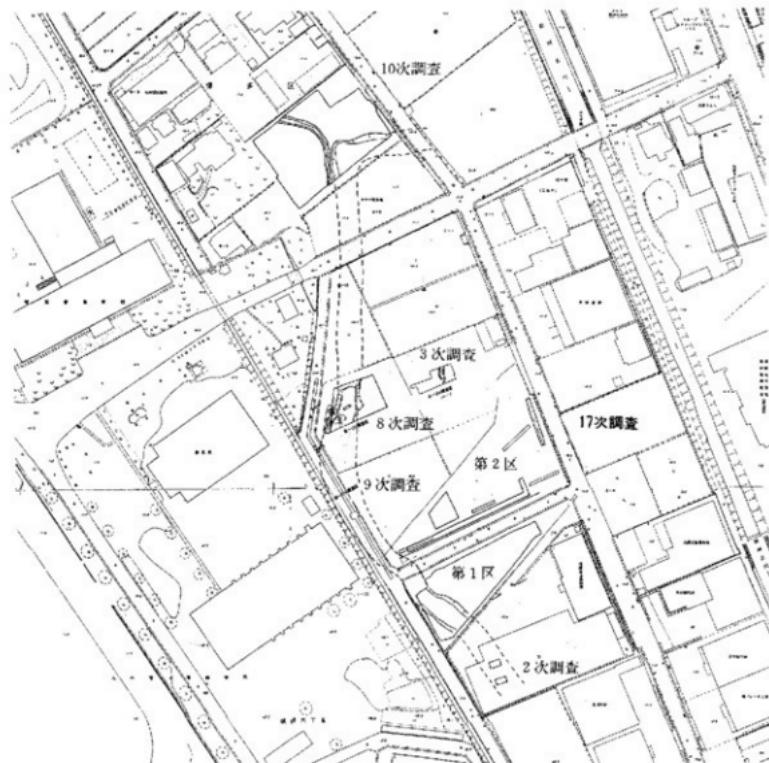


Fig.3 第17次調査開発調査地点位置図 (1/2,000)

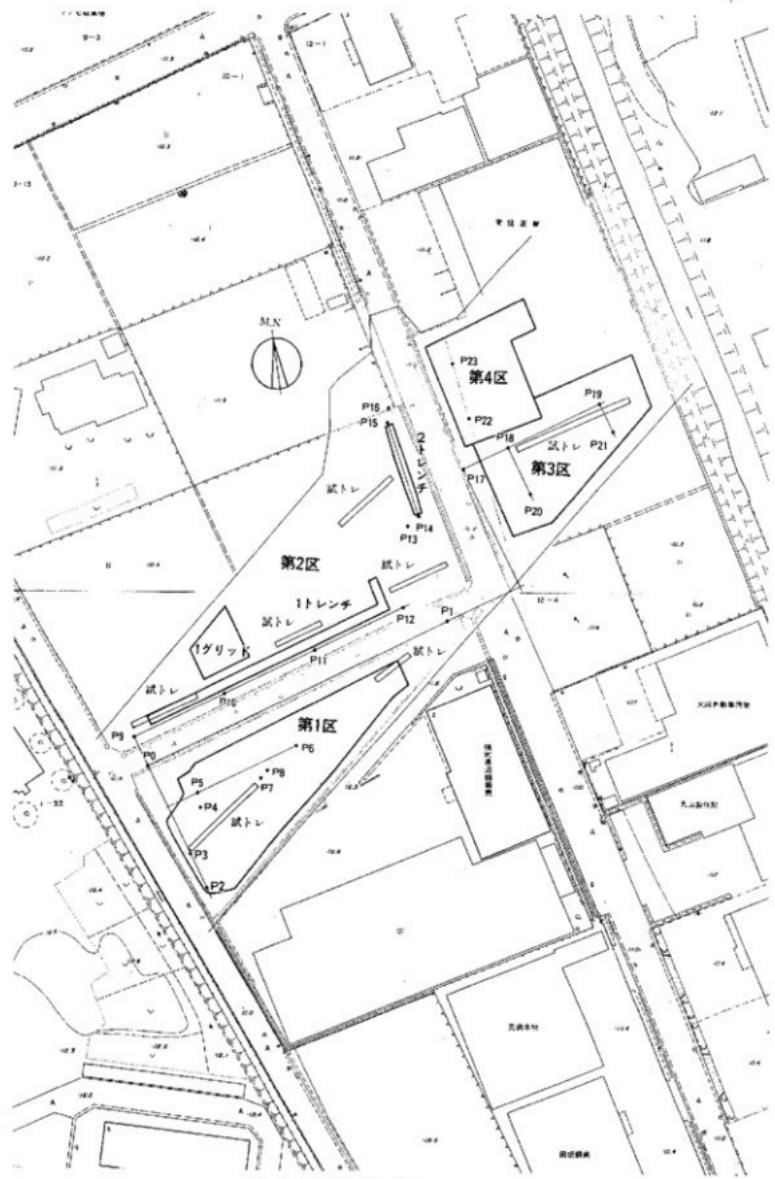


Fig.4 第17次調査、地区区配図 (1/1,000)

## 第二章 発掘調査の記録

### 1. 発掘調査の方法

1993年10月に実施された試掘調査の結果では、調査対象地域ではその西側を中心に水田遺構が存在する可能性が指摘されていた。試掘調査の対象地域は、旧国道3号線(現県道147号線)から西に福岡管区警察学校に至るまでの範囲であり、水田遺構の遺存が想定されたのは、そのほぼ中央を北流する那珂古川から西側の部分についてであった。ただし、試掘調査では、水田面は明瞭ではなく、時期も判断されてはいなかった。そこで、今回の発掘調査を実施するに当って、水田遺構を検出し、その時期を判断することに重点が置かれた。

ところで、今回の発掘調査対象区域は、現行の道路で三分されていた。また、発掘調査で生じる残土については、調査区内で処理することが望まれた。一方、水田の検出を目的としての発掘調査では、区画された調査区内をさらに細分するのは望ましくなく、極力広範囲を一時に調査することが有効であると考えられた。そこで、発掘調査区を道路で現行区画された領域ごとに区分けし、南から順次着手、表土除去時に出た残土は未調査区もしくは調査終了区に運搬し、積み上げることとした。ただし、発掘作業中に出た残土に関しては、各調査区内に溜めざるをえなかった。

遺構実測に際しては、調査区を東西に分断する道路を基軸とし、各調査区内に実測基準点を設置した。実測は、各調査区の全体を50分の1で平板実測、各遺構については適宜10分の1、20分の1を作成した。

遺構写真は、ラジコン・ヘリコプターに依る空中撮影を、第1区・第2区・第3区について実施し、隣接した第1区と第2区についてはデジタル・モザイクによって合成写真を作成した。なお、第4区については、費用的な問題から空中撮影を断念せざるをえなかった。また、これとは別に各調査区について、24mの高所作業車による写真撮影を行なった。そのほか、個々の遺構写真は、適宜撮影した。なお、空中撮影は、写測エンジニアリング株式会社に委託し、6×6版のカラーボジフィルムとM Oディスクでの納品を受けた。その他の写真は、6×7版と35ミリのモノクロとカラー写真フィルムで撮影している。



Ph.1 第17次調査地点遠景 (南西より)

## 2. 発掘調査の経過

発掘調査には、平成10年9月1日の調査機材搬入、重機による第1区の表土掘削をもって着手した。平成11年3月25日の撤収にいたる調査経過は、以下の通りである。

平成10年

- 9月1日 福岡市博多区東那珂遺跡の発掘調査現場より、調査機材を搬入。第1区よりバックホーによる表土剥ぎを開始する。
- 9月2日 表土剥ぎと平行して、包含層にトレーナーを設定し、厚さと地山の状態を確認する作業を開始する。
- 9月28日 大溝遺構のプランを確認する。
- 10月5日 大溝の調査に着手する。中央にトレーナーを設け、堆積状況を確認。中程の粘土層から上を上層として、この部分から調査を進める。
- 10月13日 大溝西側の台地裾部分について遺構検出。精査を行う。
- 10月27日 測量基準点設置。
- 11月4日 大溝上層の平板実測。大溝から、墨書のある折敷底板が出土。
- 11月9日 大溝上層の写真撮影。第2区にバックホーでトレーナーを設定する。
- 11月13日 第1区・第2区に実測基準杭設置。
- 11月18日 大溝中層から下層の掘り下げに取り掛かる。第2区2トレーナーにおいて水田遺構を調査。
- 11月27日 第2区の空中写真撮影。第2区に調査区を設定して、地山面の駄目押し調査を行う。
- 12月9日 大溝から木製人形出土。



Ph.2 航空写真撮影風景

12月18日 大溝下層より人面墨書き土器出土。第3区表土剥ぎ。第2区埋め戻し。

12月22日 第1区の空中写真撮影。

12月25日 第3区の調査開始。

平成11年

1月28日 第1区の一部・第3区埋め戻し。

2月1日～2月17日 諸岡B遺跡の発掘調査を平行して実施する。

2月22日 第4区の表土剥ぎ開始。盛り土中に近世の墓石が多数埋め込まれている。他所から持ち込まれたものであるが、紀年が見られたので、写真と拓本を取ることとする。

3月3日 第4区の調査に着手。隣地の地主から昭和47年に水田に盛り土をした旨を聞く。墓石は、この時に埋め込まれたものである。

3月23日 第4区埋め戻し。

3月24日 第4区埋め戻し終了。第1区の埋め戻しに着手。

3月25日 発掘調査機材撤収。高畠遺跡第17次調査終了。



Ph.3 第1区・第2区全景

### 3. 遺構と遺物

今回の発掘調査では、大溝・溝・土坑・柱穴・水田・川などを検出した。以下では、調査区ごとに遺構を紹介し、その出土遺物を報告する。

#### (1) 第1区

最も南側の第1区は、試掘調査の結果では、ほぼ全面に遺物包含層が残っていることが予想され、「その下に水田面らしき層が見られたがはっきりしない」と報告されていた。そこで、まず重機で包含層直上まで表土を除去し、以下を人力で掘り下げることとした。実際には、第1区西端で丘陵裾部の地山粘土層を検出、これに接して包含層を切り込む大溝を確認したため、包含層の掘り下げ調査は一時中断し大溝を調査、その後包含層の掘削を再開した。

なお、第1区東側では、西側では多量の遺物を含んでいた粘質土層中に、ほとんど遺物が入っていないなったため、トレンチ・グリッ



Ph.4 第1区全景（南東より）

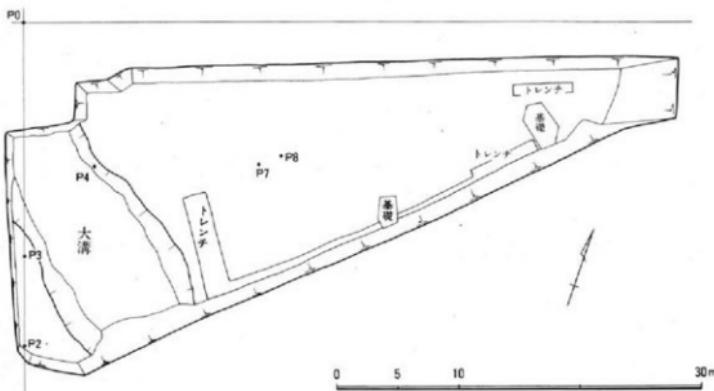
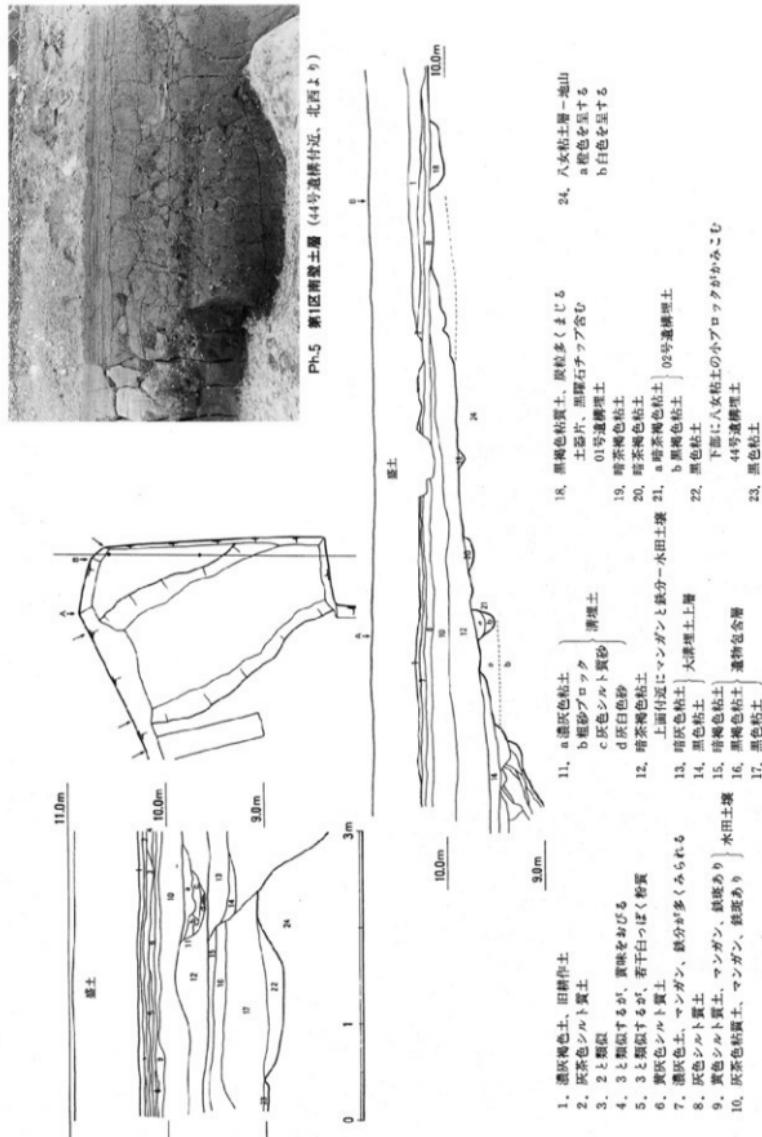


Fig.5 第1区実測図 (1/400)



- 11 -

Fig.6 第1区南壁土層実測図 (1/50)

下を設定して地山の状況を確認するにとどめた。

また、大溝の際から東側にかけては、包含層直下の地山面において、若干ながら遺構が確認できたため、包含層下遺構面として記録を取った。しかし、試掘調査に言う包含層下の水田面らしきものは、全く確認できず、むしろ包含層の上層で、水田土壤が認められた。ただし、洪水砂など水田面精査の鍵となる土壤は見当たらず、現実的には検出不可能と判断し、この水田面の調査は断念した。

#### A. 包含層上層水田

包含層上層で確認した水田土壤は、層位的には第2区2トレンチで調査した水田面と同一面と考えられる。第2区の調査では、遺物が得られず、水田の時期が判断できなかったので、第1区の当該水田層出土遺物について、検討しておきたい。Fig.8-3は、水田に伴う溝から出土した土師器の皿である。Fig.6では、11層がこの溝の埋土に当る。最下部の堆積である11d層は粗砂で、水が流れていったことを示している。土師器の皿は、11d層から完形品で出土した。体部は横ナデ調整で、外底にはへら切り痕跡が見られる。Fig.8-4は、12層から出土した土師器の壺である。12層は、後述する大溝の上を覆う黒色粘質土層で、その上面が水田面に当る。土師器壺は、外底部はへら切りである。体部の器壁は摩滅しており、器面調整はみえなかった。丸底に作るが、いわゆる底部押し出し技法によるものではない。

Fig.8-4を含む粘質土層が堆積した後、Fig.8-3の水路を伴う水田が営まれている。遺物からは、11世紀前半までに粘質土層が形成され、11世紀後半には水田が営まれたと推定できよう。

#### B. 丘陵裾部

第1区西辺付近において、中位段丘の緩斜面を検出した。八女粘土層であるが、還元されたためか、標高9.4m以上では黄茶色、9.0~9.4mで橙色、9.0m以下では白色を呈する。9.65m前後で傾斜がなくなりほぼ水平な面となるが、削平によるものである。

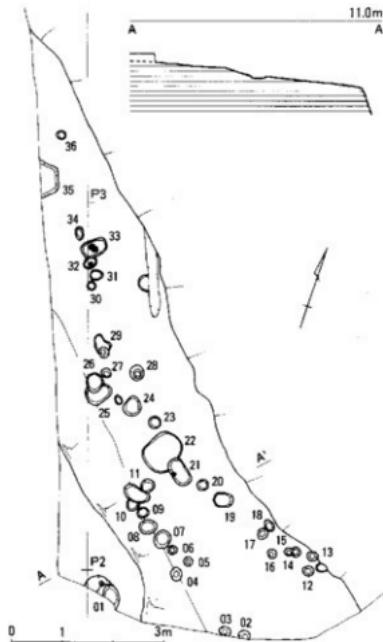


Fig.7 第1区丘陵裾部遺構平面図 (1/100)

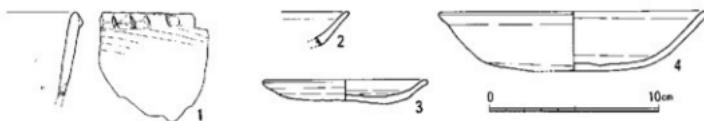


Fig.8 第1区丘陵裾部遺構出土遺物実測図 (1/3)

柱穴・土坑を調査したが、出土遺物が少量で、時期を決定できる遺構は少ない。Fig.8に、図化することができた遺物を紹介する。1は、縄文時代晩期夜臼式土器の甕の口縁部である。口縁端部の外面に断面三角の突帯を貼りつけ、工具で刻みを入れる。内面はナデ調整、外面には条痕が見とめられる。01号遺構出土。2は、土築器の壺の口縁である。摩滅し、調整は残らない。32号遺構出土。

縄文時代晩期から古代にかけての遺構が営まれているものと思われる。



Ph.6 第1区包含層下遺構面（北東側）

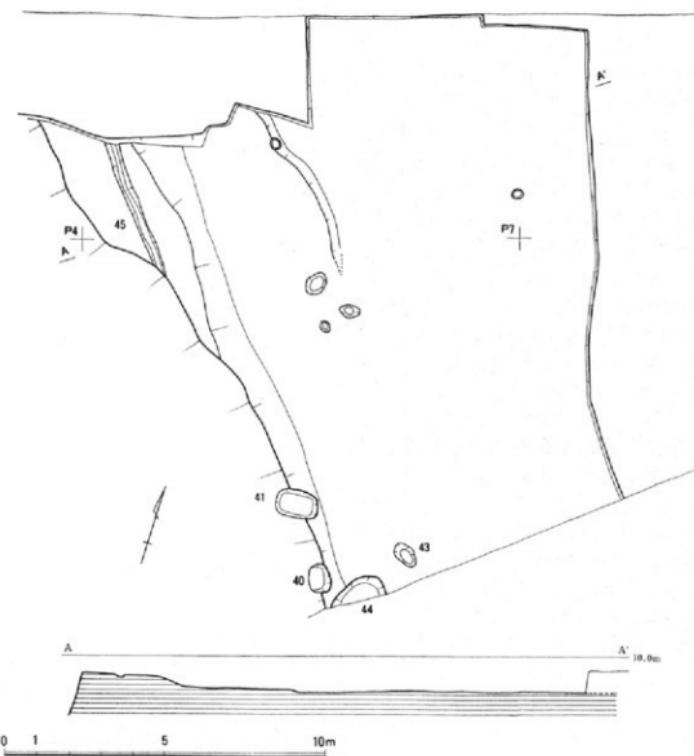


Fig.9 第1区包含層下遺構面実測図 (1/150)

### C. 包含層下遺構面

黒色粘土層中に遺物の包含が著しかった第1区西側について、グリッドを設定して包含層の掘削を行なったところ、黒色粘土層の下の八女粘土面において、若干の遺構を検出した。小溝1条、柱穴状ピット6基を調査したが、出土遺物がほとんどなく、時期を判断できなかった。後述する土坑(P.37~39)の時代観を援用すれば、縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺構と思われる。

なお、大溝に近い部分では、中位段丘壠の一部と見られる傾斜がわずかに認められた。この傾斜の尽きたところから東側では、八女粘土上面はほとんど傾斜を持たず水平に伸びており、人為的な要素を感じさせるが、明らかにはできなかった。

### D. 大溝

第1区の西端付近から、弥生時代から古墳時代の包含層である黒色粘土層を切って検出された、幅8.5~11.5mの溝状遺構である。調査区西側の中位段丘の壠に沿って流れていたもので、前章で紹介した第2次・第8次・第10次調査検出の溝と繋がる一連の遺構である。

大溝の調査に当っては、まず中央と南壁沿いにトレーナーを設け、溝の堆積状況・埋没状況を確認した。溝の埋土は、基本的に細砂と細砂・シルト質粘土の互層である。また、頻繁に掘りなおし、流路の移動があったようで、非常に複雑な堆積を示している。そこで、埋土の中ほどに堆積した細砂とシルト質粘土が連続する層群を中層とし、これより上を上層、下を下層として掘り分ける事とした。なお、上層と下層それぞれの底面において観察された多くの流路については、r-1・r-2...として細

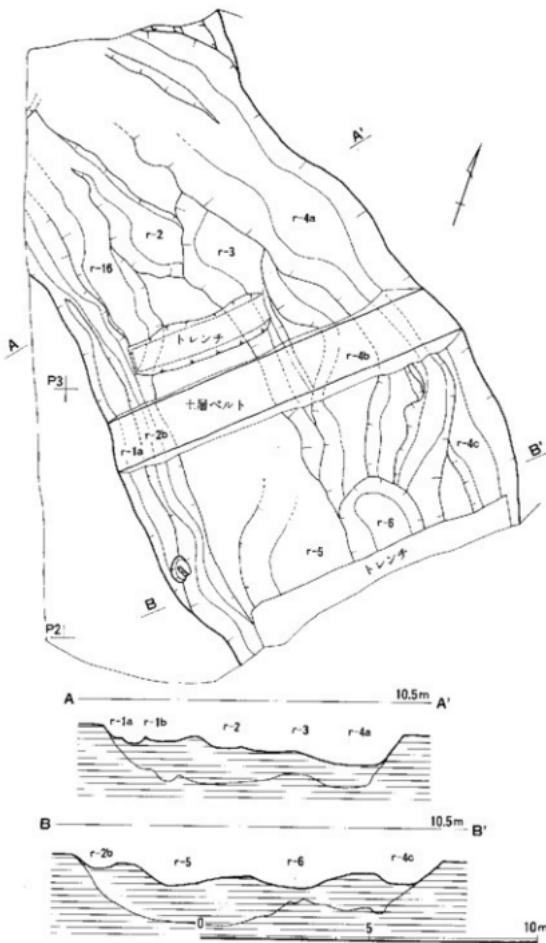


Fig.10 大溝上層流路実測図 (1/150)

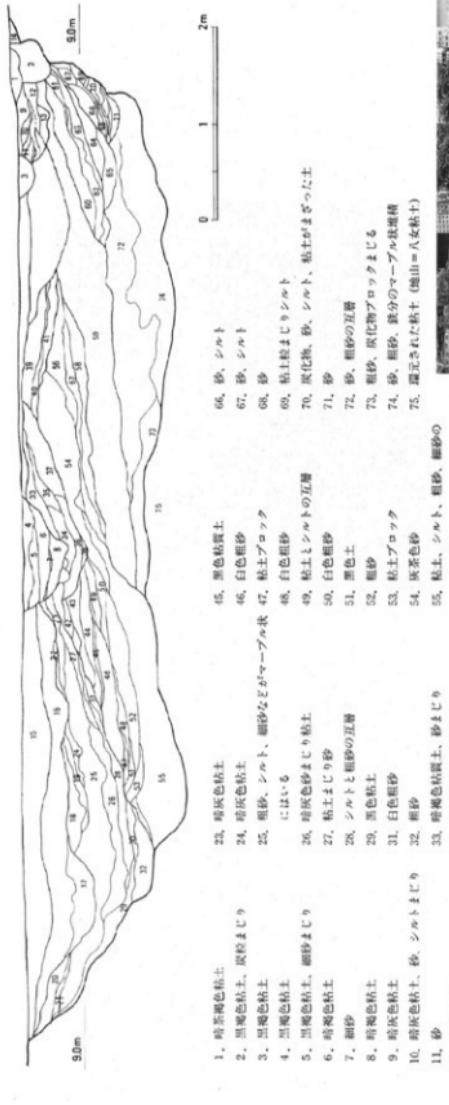


Fig.11 第1区大溝ベルト土質実測図 (1/50)

Fig.7 第1区大溝土層地盤状況 (北西より)

分し、できる限りこれに基づいて遺物の取り上げを行なった。

Fig.10に、上層での大溝の平面図を示す。これと土層断面図から、大溝としての最終段階はr-4であり、最末期にはr-1aもしくは土層図4~8層の小規模な溝になったことがわかる。当然機能的にも全く別の、単なる区画溝・排水溝的な性格に変わったことが推測できよう。

大溝上層からの主要な出土遺物をFig.12に図示する。1~5・8は、土師器である。1・2は、同型の平底壺で、r-4 bの底から出土した(Ph.9)。底部は平底で回転ヘラ切り、体部は横ナデ調整する。外底部には墨書きが残る。1は、「子」であろう。2は、文字の丁度中ほどから底部をヘラで切り離した最も突起があり、墨が飛んでしまっているが、1の墨書きと字画が似ている点から、同様に「子」と読みたい。3は、椀である。平坦な底部から直線的に開く体部を持ち、その屈折部に高台を貼りつける。器面は摩滅し、調整痕は残っていない。4は、内面を焼した黒色土器A類の椀である。体部は丸みを持ち、深い。内面には密にヘラ磨きを施すが、外面は横ナデ調整にとどまる。5は、壺である。内湾気味に開く体部を持つ。底部は回転ヘラ切りで、内外面とも横ヘラ磨きを加える。8は、壺の底部であろう。透かし穴部分の破片である。r-1からの出土。6・7は須恵器の壺である。6は平底で、回転ヘラ切りする。体部は横ナデ



Ph.8 第1区大溝上層流路群（北西より）

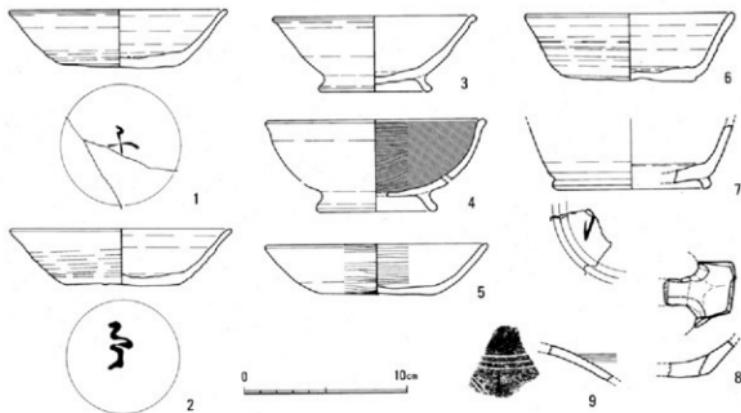


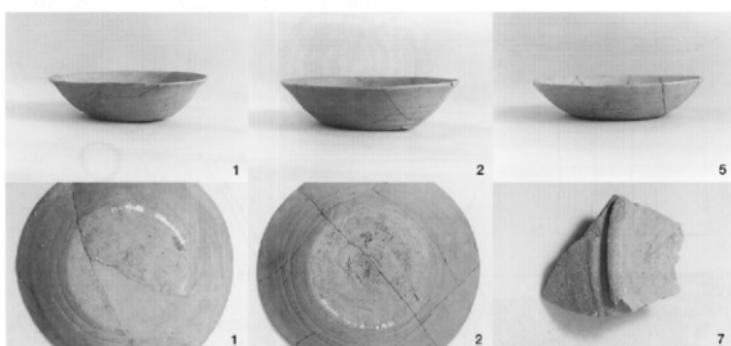
Fig.12 第1区大溝上層出土遺物実測図 (1/3)



Ph.9 第1区大溝上層遺物出土状況



Fig.21-92



Ph.10 第1区大溝上層遺物

調整である。7は、高台坏の底部片である。外底部に墨書があり、文字の一部であろう。r-1から出土。9は、弥生時代前期の壺型土器である。肩部で、平行沈線文と弧文が残る。r-3bから出土した。

瓦は、平瓦のみが出土した。Fig.19-78(r-3)、79・81・82・84(r-4)がそれで、いずれも凹面は布目、凸面は繩目叩きである。焼成は須恵質で、灰色を呈する。Fig.20-87は、瓦磧である。瓦質に焼成されているが、須恵質の甘いものであろうか。r-4出土。

木製品も若干出土している。Fig.21-92は、小型の曲げ物である。底板を欠き、側板のみが丸く出土した(Ph.9-(2))。楕の薄板の内側に切れ目を入れて丸く挽め、桜の皮で留めている。r-4からの出土である。Fig.23-106は、人形である。顔・腕の一部と、右足の先端を欠く。柾目どりした幅3.3cmほどの薄板に、両側から切込みを入れ、頭部・腕部を作り出す。頭部の中央に、墨で眉・目・鼻・口を描いている。顔以外には、墨書等による表現は認められない。r-4から出土した。

石製品では、紡錘車・石鎌・剥片が出土した。Fig.24-110は、r-3から出土した紡錘車である。シルト岩製で、研磨による条縫が認められる。120・121は、黒曜石の石鎌である。120は、いびつな三角形を呈するが、押圧剥離が並ぶなど折損した形跡ではなく、平基式のゆがんだものと考える。121は、凹基式石鎌である。光沢が強い黒曜石で、長崎県腰岳産と思われる。

以上で特に注していないものは、上層の掘り下げ時に出土した遺物である。

3・4の編年観から、大溝上層の最終埋没時期は、10世紀代と考えられる。また、1・2から、r-4

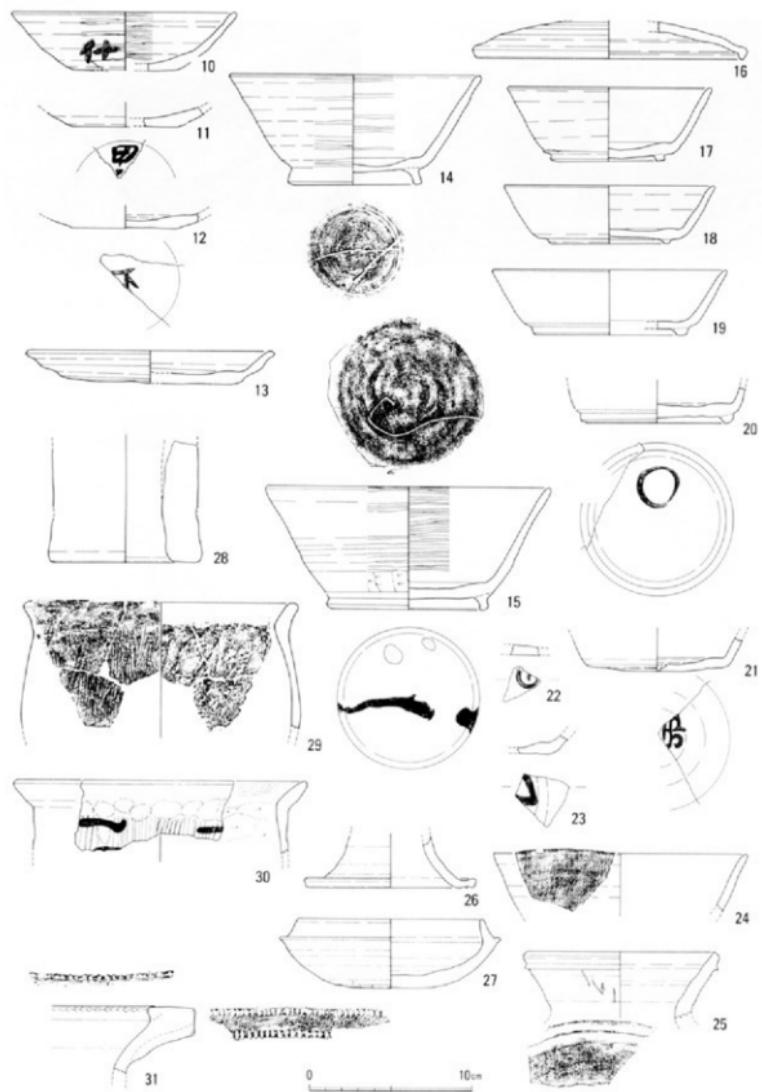


Fig.13 第1区大溝中層出土遺物実測図 (1/3)



Ph.11 第1区大溝中層出土遺物

は、9世紀代の流路であろう。したがって、上層の流路群の時期は、9世紀～10世紀に該当する。

次に、中層の出土遺物をFig.13に示す。10～15・28～30は、土師器である。10～12は平底壺で、墨書きを持つ。10は、体部下位に「什」と書く。内面は密にヘラ磨き、外面は横ナデの上に疎らに横ヘラ磨きを加える。11は、外底部に「田」□と読める。二文字目は、ほとんど残っていない。12も、外底に墨書きしている。「下」と見えるが、文字の一一部が見えるだけとすれば、別の文字の可能性も少なくない。これらの外底部は、回転ヘラ削りである。13は、皿である。底部は回転ヘラ切りで、体部は横ナデ、内底は静止ナデ調整する。14・15は、高台壺である。外底部は回転ヘラ切り、体部は横方向にヘラ磨きする。14の外底部には、×印のヘラ記号が見られる。15のヘラ記号は蛇形で、内底部に刻まれている。また、外底部には黒褐色の漆と思われる付着がある。なお、体部の裾から高台にかけては、横方向のヘラ削りを加えている。28は、筒形を呈しており、器台であろう。器面が荒れており、調整は見えない。29・30は、甕である。体部外面は縦刷毛、内面はヘラ削りする。29の外面は煤けて、黒光りしている。30の外面には、左右の眉と日の一部と考えられる墨書きがあり、人面墨書き土器と知られる。16～25は、須恵器である。16は壺蓋で端部の返りは小さい。17～20は、高台壺である。20の外底部には、「○」印を墨書きする。21・23は、平底壺である。共に文字と思われる墨書きを持つが、一部分のため、判読できない。22も、壺の底部である。記号を墨書きする。24は、壺の口縁部である。三本沈線のヘラ記号を刻む。25は、壺の頸部から口縁部にかけての破片である。外面に、仮

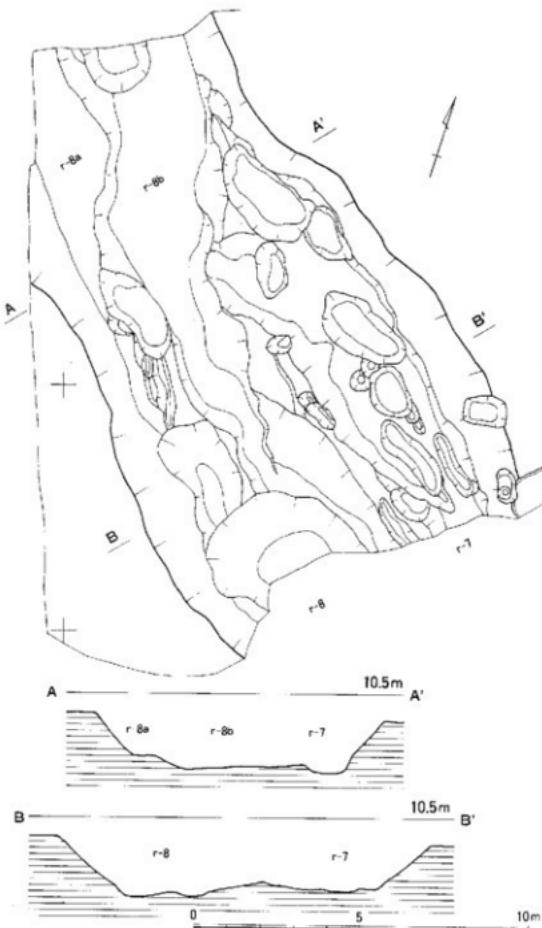


Fig.14 第1区 大溝下層流路実測図 (1/150)



Ph.12 第1区大溝下層流路群（北西より）



Ph.13 第1区大溝下層発掘状況（北より）

名文字風のヘラ記号を刻む。26は、脚の裾である。27は、須恵器の坏であるが、時代的にはかなり先行するタイプである。31は、弥生土器である。弥生時代中期初め頃の、金海式壺棺の口縁部と思われる。

Fig.19-80・83・85、Fig.20-86・88・89は、瓦・瓦磚である。特徴的には、前述した上層出土の瓦・瓦磚と差異はない。89の瓦磚の一面には、竹管で押した円形の浮文が見られる。87～89の瓦磚は、火熱を受けて焼き締まっている。

木製品では、曲げ物・不明部材・斎串・絵馬・木簡などが出土している。Fig.21-94・95は、曲げ物の底板である。99は、組み合わせの部材だが、用途不明。100・101は、棒状具の先端である。端部は、

細かく削って面取りする。100の折損部は、刀物で削りこんで、折り取っている。104・105は、木札である。両側から切れこみを入れて、頭部を作る。105の頭部先端は、山形に削られている。107は、絵馬である。肩から頭部にかけてと、背から上を欠失する。墨の残りは非常に悪く、見取りにくいが、かろうじて墨を追うことができる。これについては、第三章で詳説する。108は、木筒である。板材の縁辺に沿って二孔一対の穿孔があるので、折敷の底板を転用したものと思われる。r-5底の粘質土中より出土した(Ph.16(I))。これについても、第三章で触ることにする。

石製品は、紡錘車・勾玉・黒曜石剥片などが出土している。Fig.24-109・112は、紡錘車である。109は、粘板岩製で、扁平な円盤状をなし、研磨痕跡を留める。112は、滑石製で、裁頭円錐形に削り出される。113・114は、勾玉である。113は翡翠製で、淡い緑色を呈する。114は、安山岩である。

大溝中層の遺物は、後述する下層の遺物とは大差ない。中層は、もともと調査の目安として、上層の流路の河床に該当するシルト質粘土で設定した層なので、下層に含めても何ら支障はないものである。

大溝下層では、大きく二本の流路を検出した。r-7とr-8がそれで、Fig.11に見るようr-8が当初の大溝である。r-8は、最も規模が大きい流路で、西は遺構検出時の大溝西岸いっぱい、東は土層断面の半ばを過ぎてもまだ立ち上る様子がないところから、大溝東岸かそれに近い位置までの幅を有していたものと推測できる。おそらく、9m前後の幅はあったものと思われる。r-7は、若干規模を縮小しているようで、推定幅は6m前後



Fig.14 第1区大溝下層人面墨書き土器出土状況

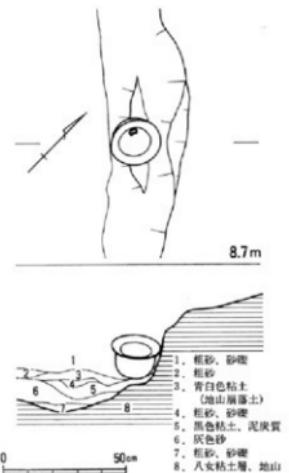
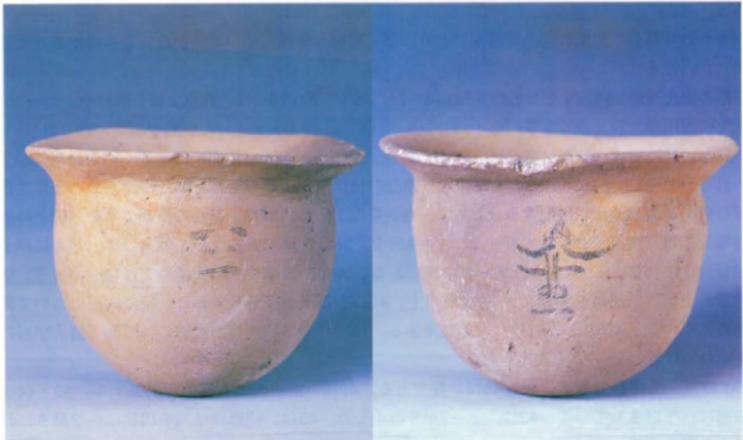


Fig.15 第1区大溝人面墨書き土器出土状況 (1/20)



南より

北西より



Ph.15 人面墨书土器



Fig.23-108



Fig.22-97



Fig.17-55



Fig.18-77

Ph.16 第1区大溝中・層下層遺物出土状況

である。

いずれの流路も、底部は凹凸に富んでおり、厚く粗砂が堆積している。かなりな水量があったと考えて、良いだろう。

下層の出土遺物の内、主要なものをFig.16~24に示す。Fig.16には、弥生土器を集めた。32~36は、弥生時代前期の壺形土器である。32・33の頸部内面には、指でナデ上げた痕跡が明瞭に残されている。33の肩部には沈線による羽状文が見られる。34は、大型壺である。内面には、薄く刷毛目調整がうかがわれる。r-7出土。35・36も大型壺で、頸部の付け根に山形の突帯を貼りつけ、その下に二枚貝腹縁の刺突による羽状文を配する。ともにr-8から出土した。37は、器台の筒部である。筒と坏部の接合部分には、突帯を一条めぐらせる。r-8出土。38は、鉢であろうか。外面には、斜めに粘土紐を貼りつけている。r-7出土。39~41は甕である。39は、後期終末の甕棺の突帯部分である。低平な突帯の上面に、沈線を刻む。r-7より出土。40は、器面が摩滅しており、特に内面において調整は認めにくい。r-7出土。41は、大型甕である。「く」字型に屈折した頸部に、断面「M」字形の突帯を貼りつける。r-7より出土した。

Fig.17は、土器師である。42~45は、坏である。42は、内外面とも横ナデ調整する。43・44は器面を密にヘラ磨きしている。43は、r-7から出土した。45は、内底部は同心円状にヘラ磨き、外底部はヘラ削りする。r-8出土。46・47は、碗である。時期的には、先行する遺物である。48は、脚付の小壺である。r-7出土。49・50は、高坏である。内外面共に、刷毛目調整を施す。49はr-7、50はr-8から出土した。51は、ミニチュアの壺形土器である。体部は指押さえ、口縁部は横ナデ調整する。52は、壺形土器である。53は、r-8の最下層から出土した、甕形の人面墨書き土器である。大溝東岸の壁に接して、わずかな段場に掘えたような状況で粗砂に埋もれていた(Fig.15)。若干傾いているもののほぼ正立しており、もし、原位置を保っているとすれば、粗砂の堆積が早く、土器が流される以前に半ば以上埋まっていたものと思われる。完形品だが、底部中央は穿孔されている。外面は、縱方向の刷毛目調整、内面は割りで、口縁部外面は横ナデ 内面は横位の刷毛目調整を施す。人面墨書きは、正面と向かって左側面とに書かれている。正面の顔は、言わば「しかめっ面」だが、側面のそれは、眉・目・口が点々と書かれただけで、気の抜けた表情を呈している。正面・側面の顔とともに、器面全体を使わず、その中央付近のみに小さく描かれているところに特徴がある。口径18.8~19.8cm、器高14.3cmを測る。54も人面墨書き土器であろうか。丸底の甕形土器底部と思われるが、墨痕が二本認められる。r-7より出土。55は、壺形土器である。r-8の底近くから、横転した状況で出土した(Ph.16-(3))。完形品である。胴部は電球を思わせる丸底で、下半部は器面が荒れ、調整痕跡が残っていない。胴部上半は、内外面共に刷毛目調整で、内面はその上を軽くナデしている。口縁部は、横ナデ調整である。口径12.6cm、器高21.8cmを測る。56も壺形土器である。体部外面は縱方向の刷毛目、内面には粘土の繕ぎ目が目立つが、上から工具で軽く押さえ、ナデしている。

Fig.18は、須恵器である。57から60は、环蓋である。57では、口縁端部が、小さいながらも「く」字型に屈折しており、器高が高い。これに対し、58では、口縁端部は肥厚気味に下方に折れ曲がるだけで、器高も低い。58の内面には、ヘラ記号が見られる。59は、端部こそ欠くが、58と同型式の蓋であろう。上面に墨書きがあり、「常陸」と読むことができる。58はr-8、59はr-7から出土した。60は、57と同型式の完形品の蓋である。扁平な宝珠形摘みが付けられている。61・62・64は、平底坏である。外底部はヘラ切りで、内底部は静止ナデ調整、体部は内外とも横ナデ調整する。61は、60と対になるもので、口縁部を一部欠くが、ほぼ完形品である。60・61は共に焼成がやや不良で、灰白色を呈している。62の外底には、薄くてはっきりしないが、丸印の墨書きが書かれている。r-8からの出土である。

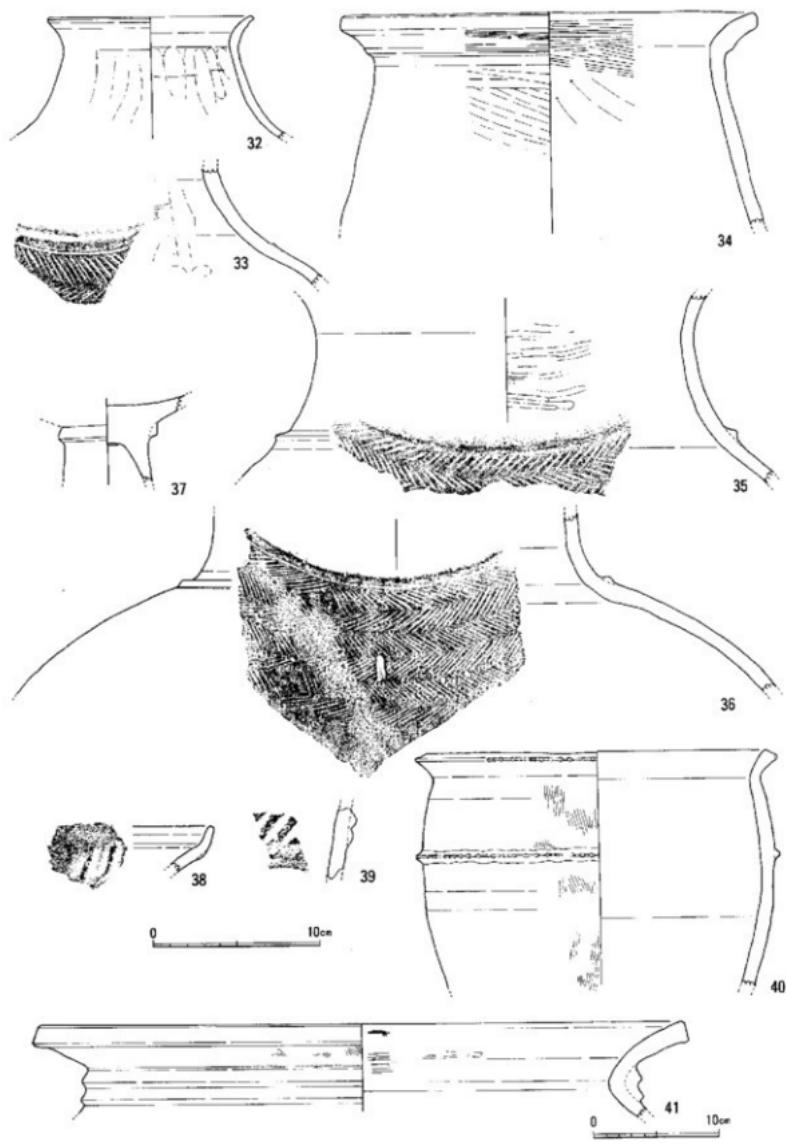
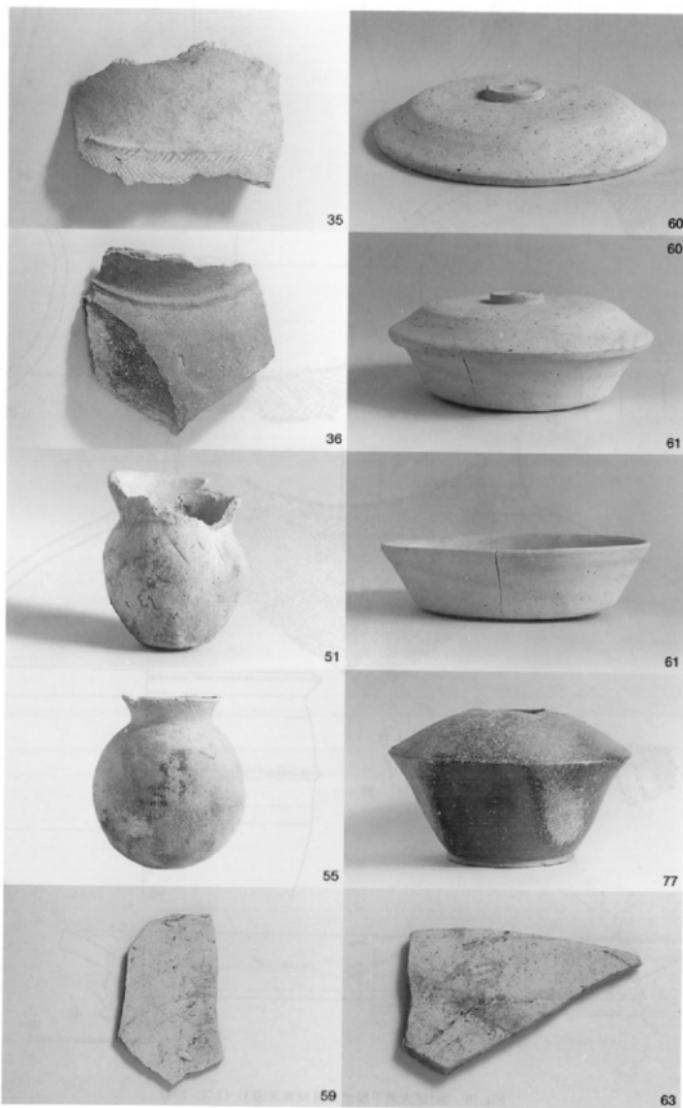


Fig.16 第1区大溝下層出土遺物実測図① (1/3, 1/4)



Ph.17 第1区大溝下層出土遺物

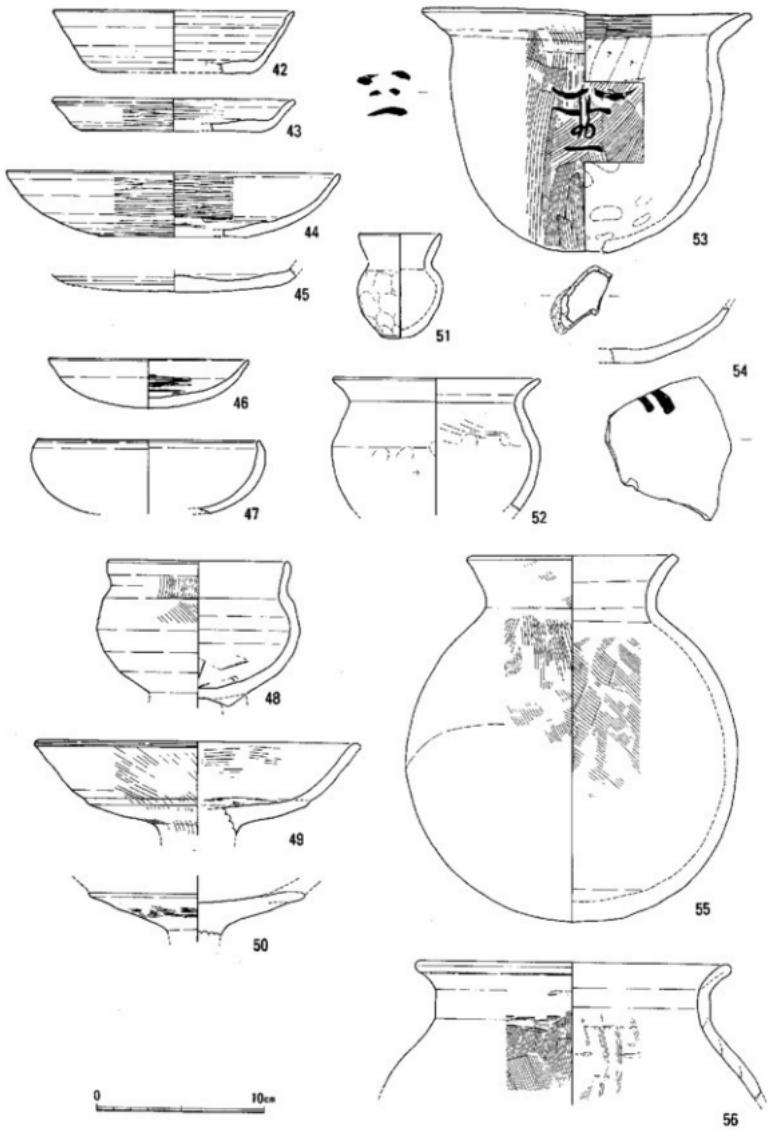


Fig.17 第1区大溝下層出土遺物実測図② (1/3)

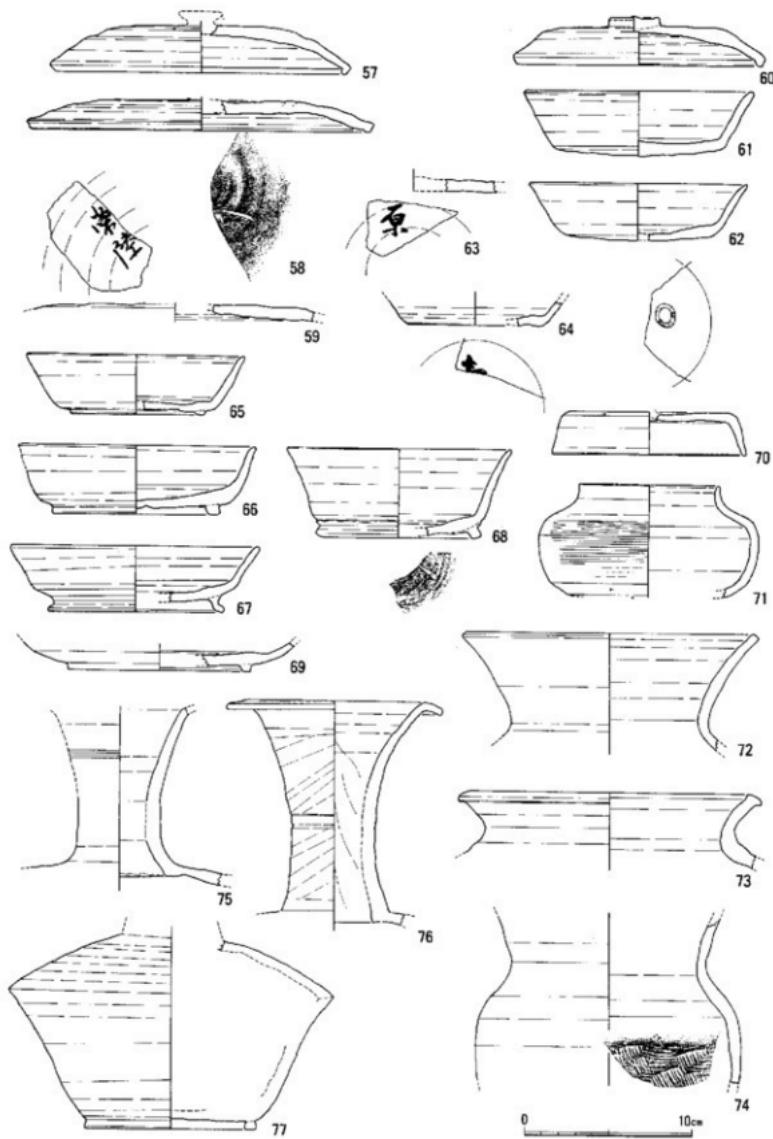


Fig.18 第1区大溝下層出土遺物実測図① (1/3)

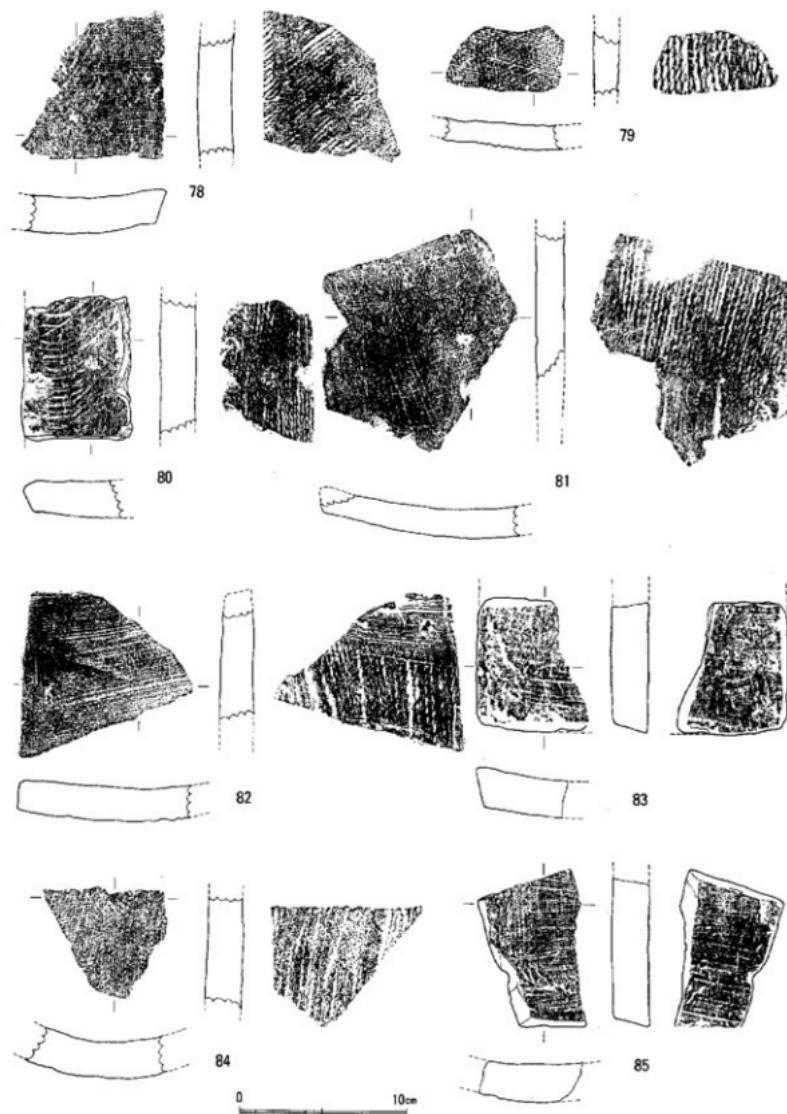


Fig.19 第1区大溝出土瓦窯測図① (1/3)

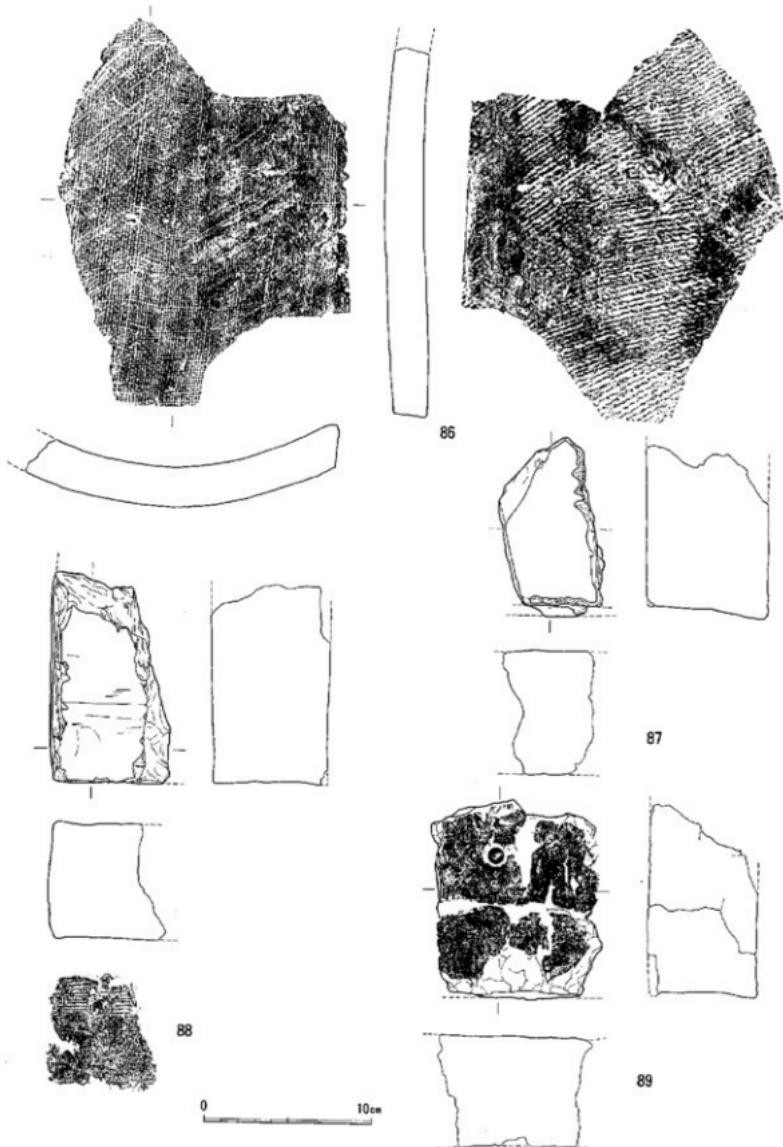
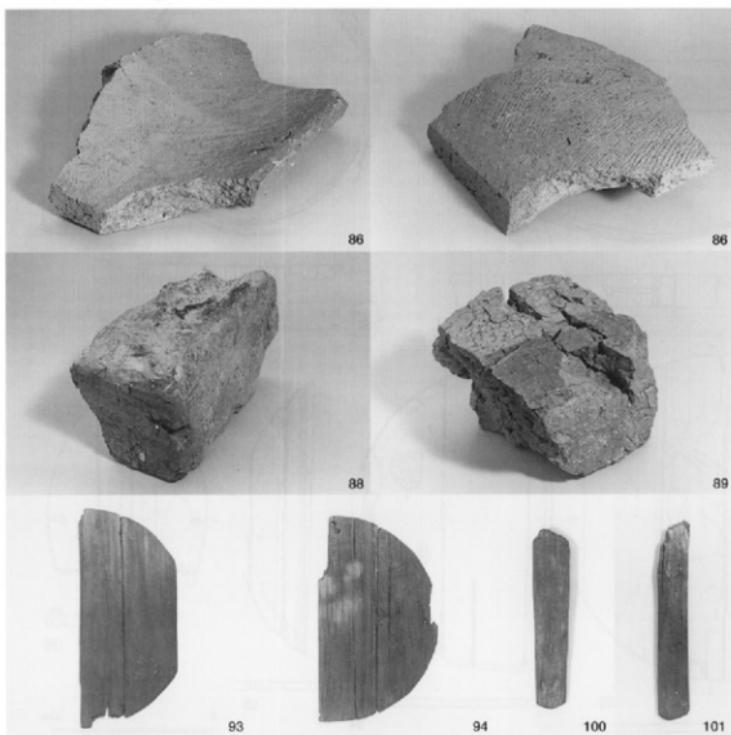


Fig.20 第1区大溝出土瓦実測図② (1/3)

64の底部にも墨書が見られる。文字の一部であることは間違いないようだが、判読するにはいたらなかった。r-7から出土した。63は、高台坏底部の破片であろう。回転ヘラ切り痕跡がある面に、「原」と墨書されている。r-8出土。65~69は、高台坏である。外底部ヘラ切り、内底部静止ナデ調整で、体部は横ナデ調整する。高台は、体部と底部の境界からやや内に入った位置につく。高台断面が四角を呈し低平なもの(65・66・68・69)と、「ノ」字を呈して高いもの(67)とがある。68の外底部には、ヘラ記号が見られる。65はr-7、67はr-8より出土した。70は、短頸壺の蓋である。天井部はヘラ削り、体部は横ナデ調整、天井内側は静止ナデ調整する。r-7から出土。71は、短頸壺である。胴部には、横位の搔き目がはいる。口縁部から内面にかけては、横ナデ調整である。72~77は、壺である。72・73は、広口壺である。内外面とも、横ナデ調整する。72は、r-7から出土した。74は、広口瓶である。胴部内面には叩きの当て具痕が残っているが、口縁部と胴部外面は横ナデ調整である。r-8からの出土である。75から77は、長頸壺である。75・76は頸部である。内外面には、絞り痕が著しい。外面は、横ナデ調整を重ねている。76は、r-8から出土した。77は、胴部のみであるが、完存している。r-8の粗砂中から、倒立した形で出土した(Ph.16-(4))。肩が突き出すように張り、緩いS字を描



Ph.16 第1区大溝出土瓦・木製品

いて底部へと狭まる。外底は平坦で、その端に高台がつく。体部下位は横ヘラ削り、その他は横ナデ調整する。焼成は良好で、黒色のテリを持つ。

木製品では、曲げ物・折敷・木札などが出土している。Fig.21-90は、曲げ物の側板である。r-7から出土した。今回の発掘調査では、底板と側板が組み合わさったままの曲げ物は全く見られず、それぞればらばらに出土している。93・96は、曲げ物の底板である。93には、細かい刃傷が多数見られる。おそらく、俎板代わりに使われたものであろう。ともにr-7から出土している。97は、大型の折敷底板であろう。痛みが激しいが、1辺55cm強を計り、縁辺には二孔一对の穿孔が見られる。多数の細かい刃傷が刻まれており、俎板として使用された事が推測できる。r-8から出土した。98は、コテ状の製品である。一面は平坦に削られ、その反対側は、一部分が摘み状に突起している。用途や機能は限定できないが、その形状からコテであると考えた。102は、板状製品である。きわめて平坦に整えられている。用途は不明だが、建具などの一部であろう。r-7から出土した。103は、斎車である。

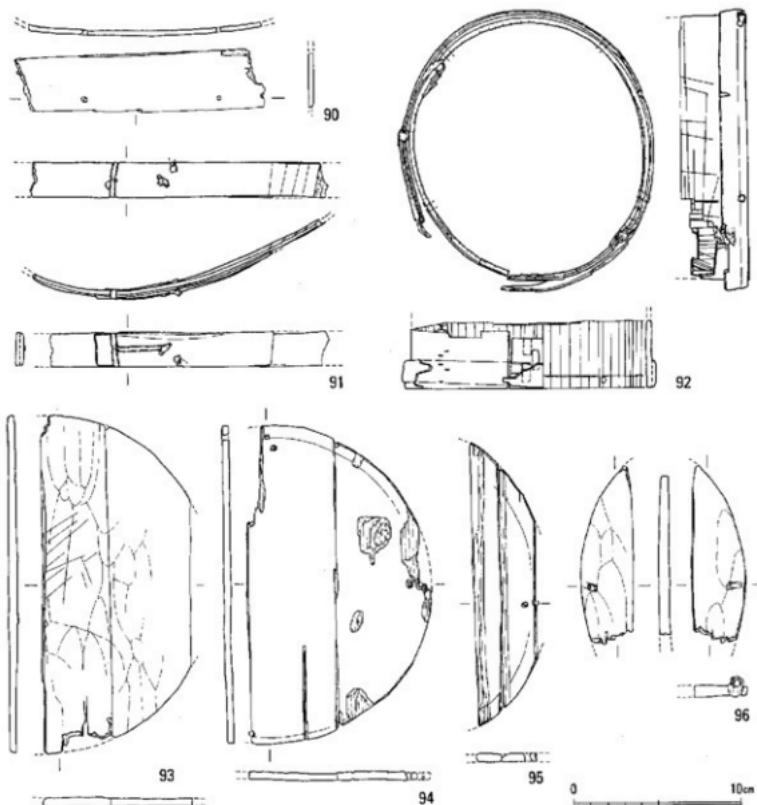


Fig.21 第1区大溝出土木製品実測図① (1/3)

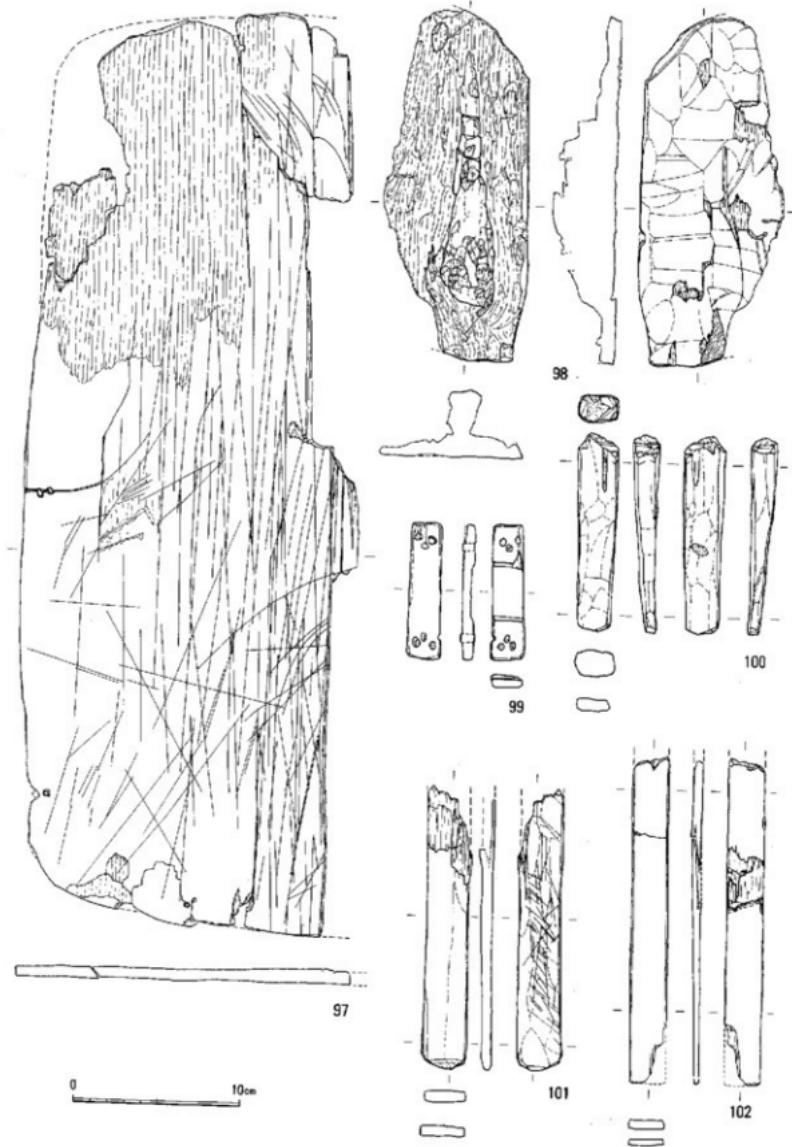


Fig.22 第1区大溝出土木製品実測図(2) (1/3)

両側から刻みを入れ、頭部を作りだしている。完形品であるが、墨書き等は見られなかった。r—7からの出土である。

石製品では、紡錘車・櫂・石斧・石鎌・黒曜石剥片などが出土した。Fig.24-111は、滑石製の紡錘車である。115は、砂岩製の櫂である。一端に穿孔がある。側面のうち、二面が極めて平滑であり、砥石に転用されていた可能性がある。116・117は、扁平片刃石斧である。堆積岩製である。117は、r—8より出土している。119は、石鎌である。回基式で、安山岩製。

以上の出土遺物の内で、特に出土した流路について触れていないものは、大溝下層の掘り下げ時に出土し、どの流路に含まれていたのか、帰属を明らかにし得ないものである。

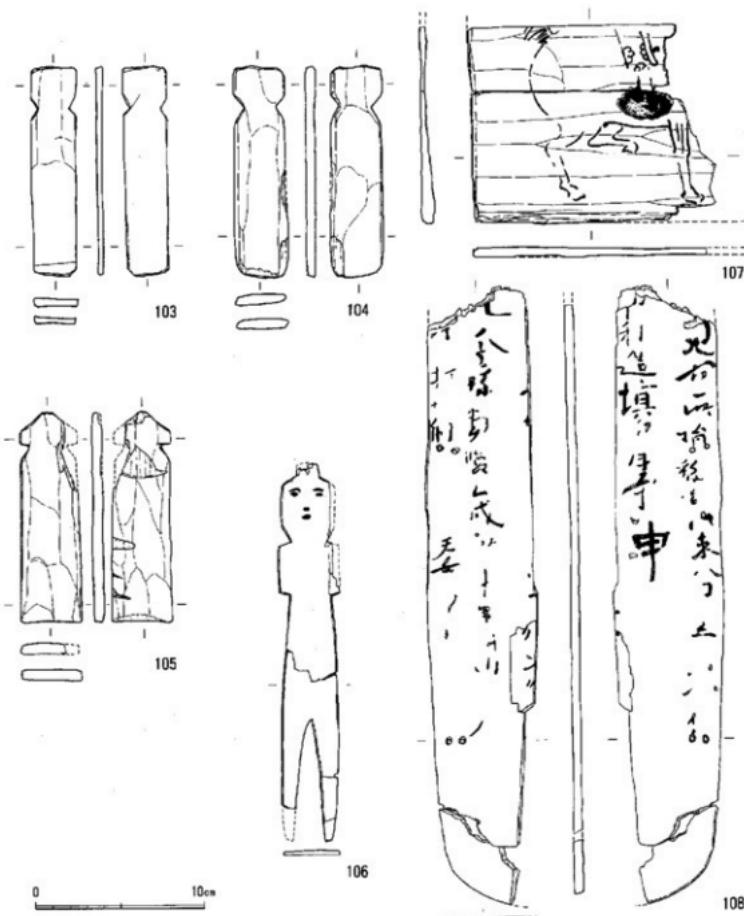
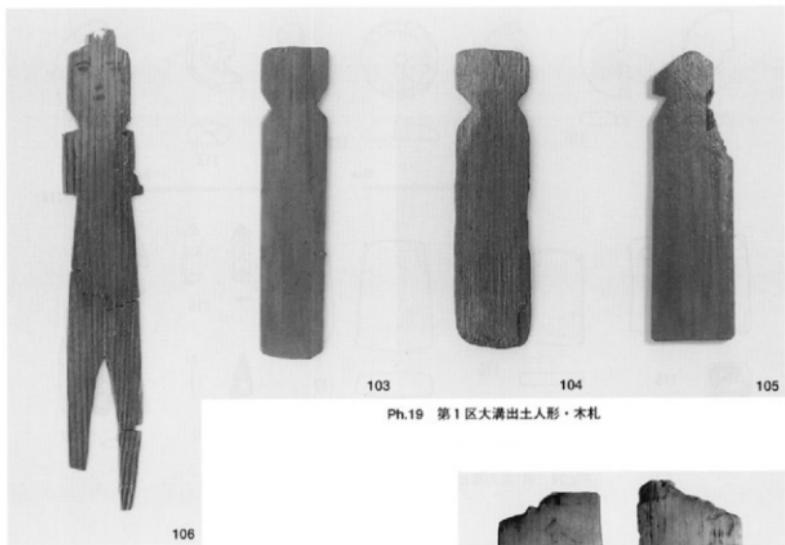
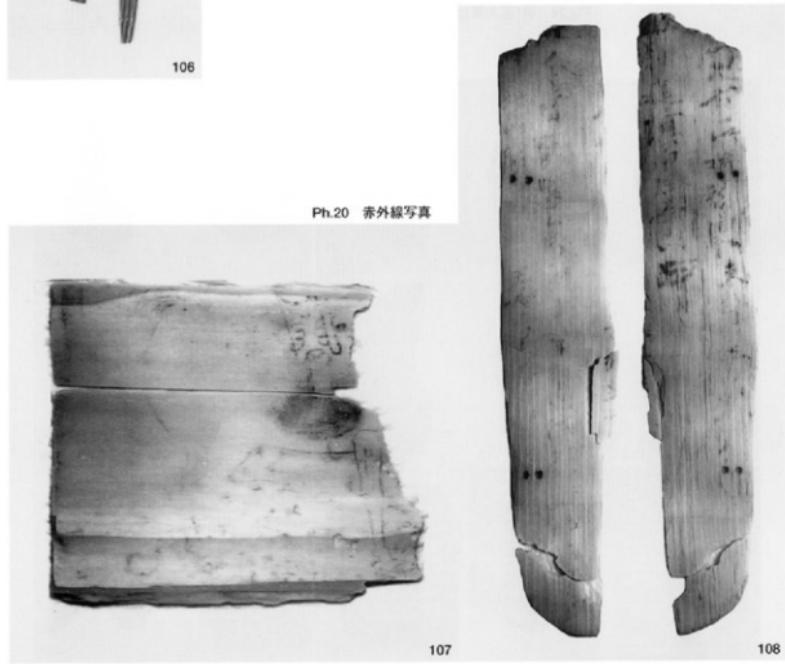


Fig.23 第1区大溝出土木製品実測図③ (1/3)



Ph.19 第1区大溝出土人形・木札



Ph.20 赤外線写真

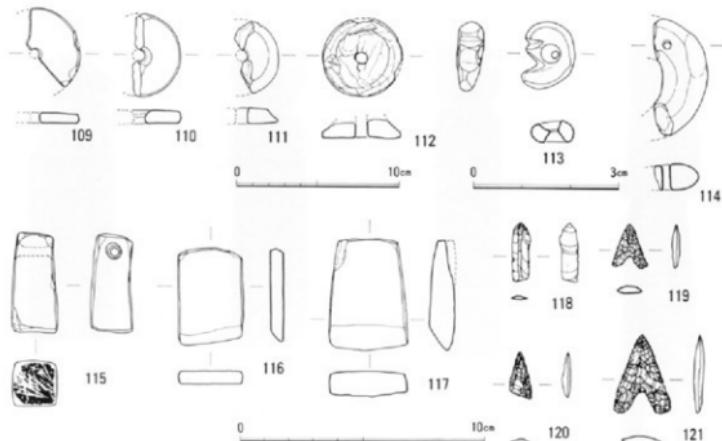
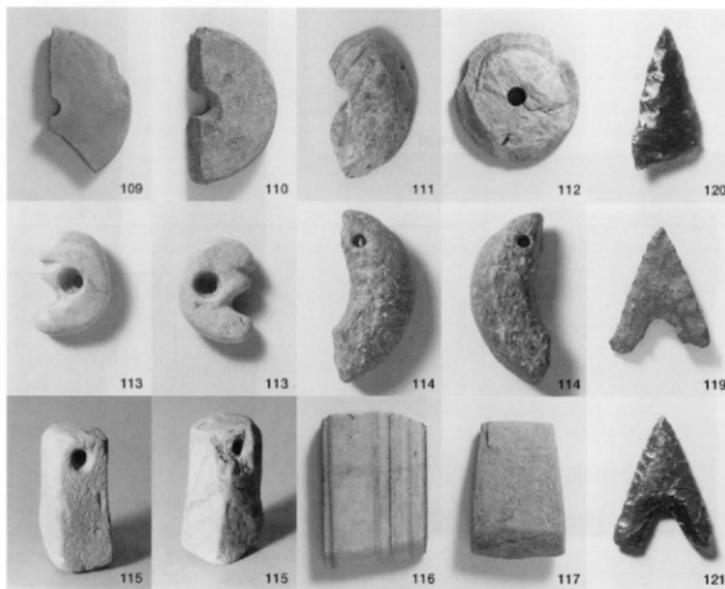


Fig.24 第1区大溝出土石製品実測図 (1/3, 1/2, 1/1)



Ph.21 第1区大溝出土石製品

これらの出土遺物から、大溝の当初の掘削時期は、8世紀前半であったと考えることができよう。

#### E. 土坑

##### 40号遺構

大溝の東岸に切られて検出した土坑である。遺物包含層に覆われて、八女粘土を掘りこんでいた。

過半を大溝に切られてしまった様で、全体を知ることはできない。おおむね長方形を呈したようである。底面はほぼ平坦だが、一部分が直径40cm、深さ20cm程の柱穴状に窪んでいる。

出土遺物をFig.28に示す。1~4は、弥生土器である。1は、前期の甕で、口縁端部に小さな刻み目が並んでい

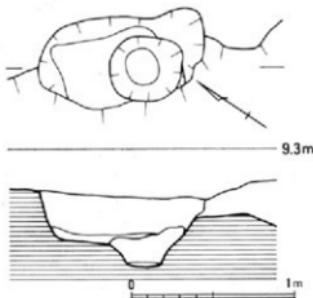


Fig.25 第1区40号遺構実測図 (1/30)



Ph.22 第1区土坑検出状況 (南西より)



Ph.23 第1区40号遺構 (北より)

る。2は、前期の甕の底部である。外面は刷毛目調整、内面は器面が剥離し不明。3は、中期初頭の甕である。口縁は三角形に肥厚し、刻み目が入る。4は、中期の甕の底部である。弥生時代中期の土坑であろう。

##### 41号遺構

40号遺構と同じく、大溝の東岸に切られて検出した土



Ph.24 第1区41号遺構 (東より)

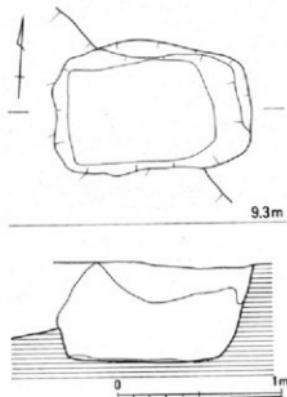


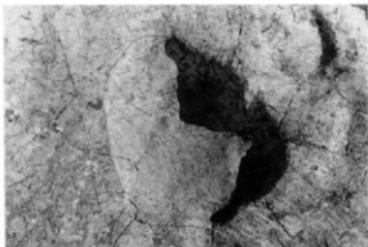
Fig.26 第1区41号遺構実測図 (1/30)

坑である。上端の半分ほどを欠くが、全体を知る妨げにはならない。おむね、長辺120cm、短辺70cmの長方形を呈し、地山面からの深さは60cmほどを測る。底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物は、弥生土器と思われる小片が出土しているのみなので、具体的に時期比定することはできない。40号遺構と同じような時期を考えたい。

#### 43号遺構

大溝遺構の東の包含層下遺構面（八女粘土面）から検出した土坑である。不整形の浅い土坑で、削平でほとんどを失い、底部のくぼみがわずかに残ったものと思われる。実測に耐える遺物は出土していない。



Ph.25 第1区43号遺構（北西より）

#### 44号遺構

大溝東岸のやや東、調査区南壁にかかるて検出した土坑である。Fig.6の14層が、44号遺構の埋土に当る。土層図に見るように、上面を包含層で覆われており、遺構が包含層に先行する事は明らかである。

半ばが調査区南壁に入っているため、全形を確認することはできなかった。調査できた範囲から

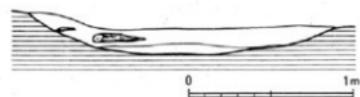
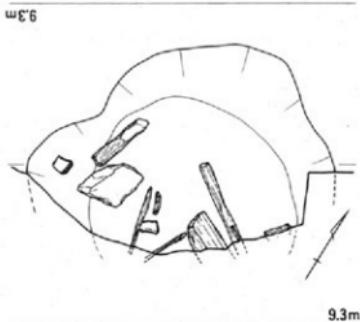


Fig.27 第1区44号遺構実測図 (1/30)



Ph.26 第1区44号遺構

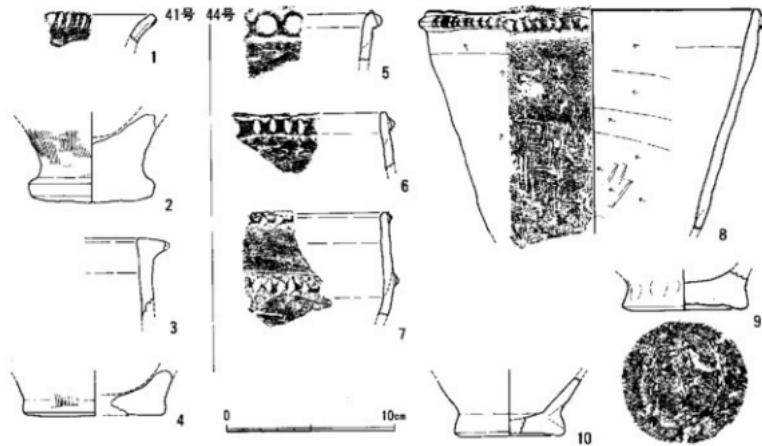


Fig.28 第1区土坑出土遺物実測図 (1/3)

推測すると、直径200cmほどの略円形を呈し、地山面からの深さは20cmほどである。

土坑埋土中からは、礫・木製品・土器片・黒曜石剥片などが出土した。礫には、人為的な加工の形跡は見えなかった。木製品は、割った可能性がある厚板状の塊と、棒状のものとが見られた。棒状のものは、整形していることは明らかだろうが、加工痕跡を見取ることが困難で、木質の遺存状況も悪かったので、実測は断念した。

Fig.28に出土土器を示す。縄文時代晩期、夜臼式土器の範疇に入るものだろう。器種としては、すべて甕である。5~8は口縁で、端部に刻み目突帯を貼りつけている。7では、胴部中位にも刻み目突帯が付き、この部分から屈曲して内傾に転じる。そうしてみると、6も内傾しているので、7と同様に部に突帯を廻らせる可能性もある。最も遺存部位の大きい8で調整を見ると、体部外面は縦方向の条痕、内面は工具を用いたナデ調整である。9・10は、底部である。くびれた部位には、指による圧痕が並ぶ。9の外底には、同心円状に指押さえの痕跡が見とめられる。

これらの出土遺物から考えて、44号遺構は、縄文時代晩期の土坑であると考えたい。

#### F. 包含層出土遺物

地山の八女粘土を覆う黒色粘質土層は、第1区と第2区全体を覆うが、第1区の西半部に限って多量の遺物を含んでいた。その主要なものについて、Fig.29~31に上げ、略述する。

#### 縄文土器

縄文時代晩期、夜臼式土器である。1・2は、鉢である。灰褐色を呈する。器面が摩滅しており、調整痕は見られない。3~13は、深鉢である。口縁端部に突帯を貼りつけるもの(8・10・13)と、口縁から下がって貼りつけるもの(3~7・9・11・12)とがある。4では、胴部にも突帯をめぐらし、浅い「く」字型に内折して口縁部となる。外面は条痕、内面はナデ調整する。ただし、4の外面は比較的丁寧にナデ調整されている。外面には、煤が付着する。

#### 弥生土器

14~22は甕である。14~18は、前期に属する。口縁部は外方に緩く屈曲し、口唇部に刻み目を入れる。刻み目は、口唇部の端面につくもの(14・15)と、下端に入れるもの(16~19)とがある。18では、口縁部と体部の境界に二条の沈線を廻らせる。体部外面は刷毛目調整、内面端ナデ調整する。外面には、煤が付着している。20・21は、中期の甕である。口縁部は、鈎状に作られる。20は、口唇部に刻み目を持つ。21は、口縁部直下に断面M字形の突帯を一条廻らせている。22は、後期の甕である。口縁部は、大きく屈曲する。口縁直下に突帯を一条廻らせる。器面は摩滅しており、調整痕は見えない。

23~27は、壺である。23~26は前期の壺の肩部分で施文される。22は、彩文土器である。薄い暗褐色を呈する丁寧に研磨された器面に、赤色顔料で文様を描く。24~26は、二枚貝の腹縁を刺突した文様帶を廻らせる。25・26では、刺突は三段以上で、鋸齒状に施される。27は、中期の壺である。頸部は大きく外し、口縁は内側に折り曲げて肥厚させる。外面はナデ調整、内面には刷毛目調整が認められる。

33は、小型の鉢である。中期に属する。内面は指押さえ、外面はナデ調整する。

34は、中期の高環である。口縁部を鈎状に作る。器面は摩滅し、調整痕は見えない。

#### 土師器

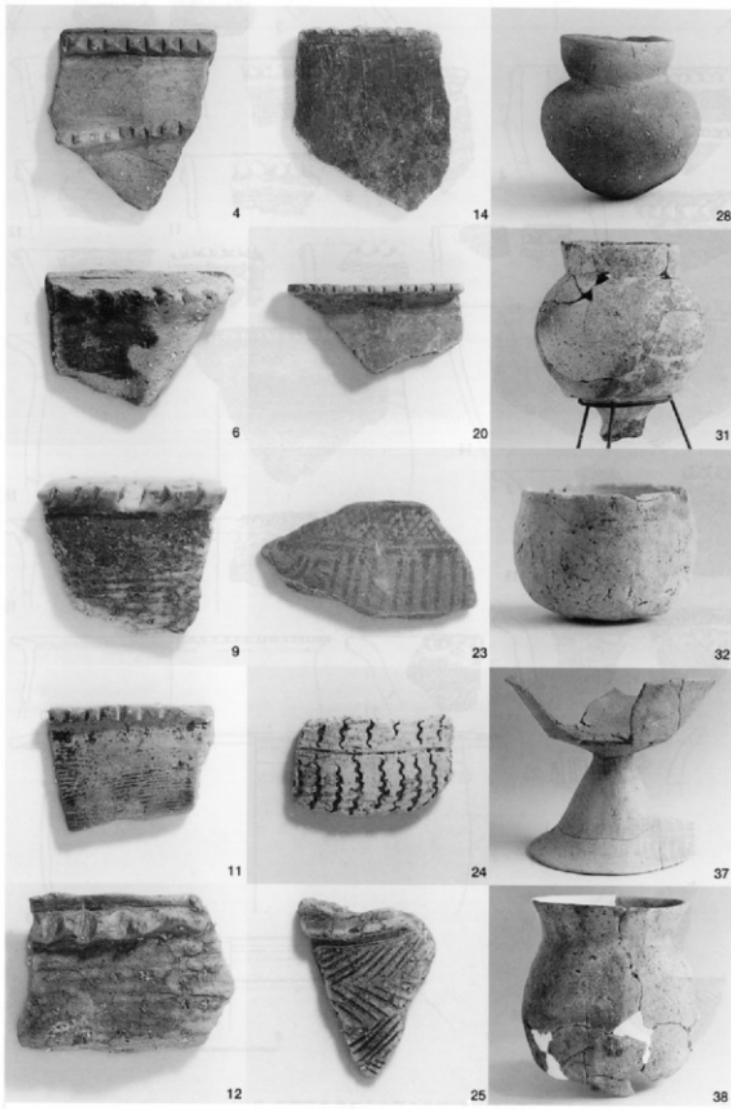
28~30は、小型丸底壺である。31は、脚付きの壺で、体部下端と底部との境に突帯状の張り出しを作る。器面の荒れは、著しい。



Ph.27 第1区包含層遺物出土状況



Fig.29 第1区包含层出土遗物实测图① (1/3)



Ph.28 第1区包含层出土遗物

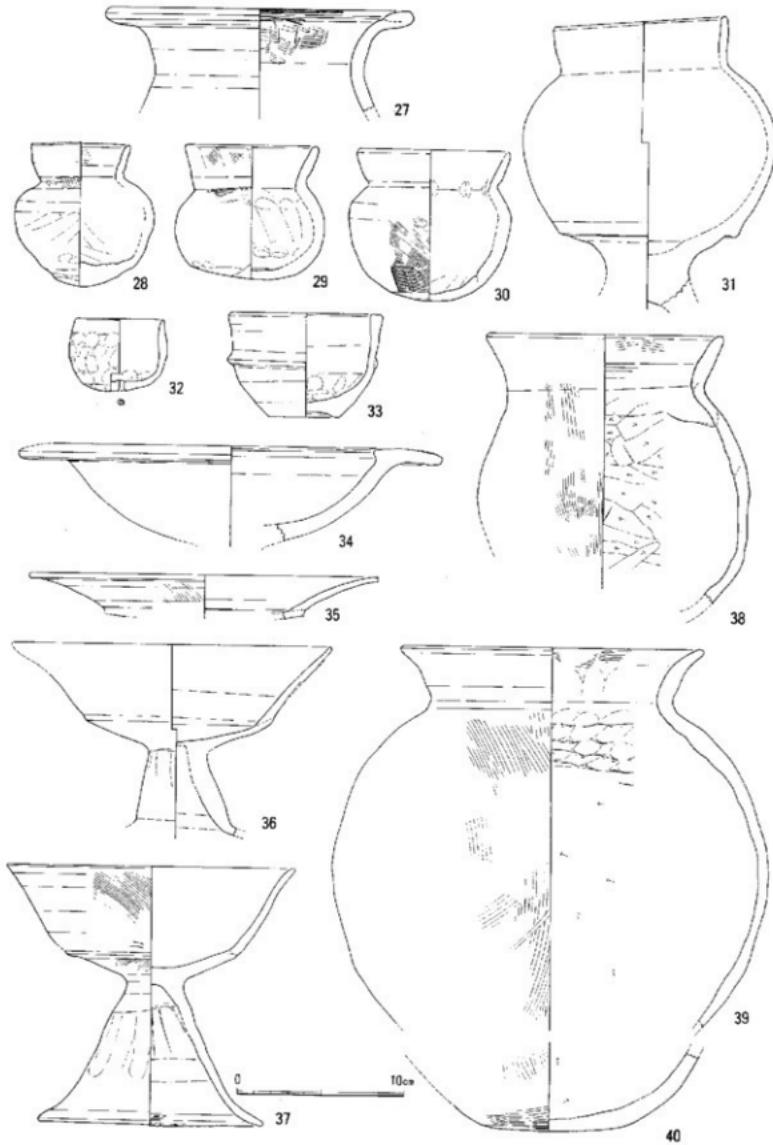


Fig.30 第1区包含層出土遺物実測図② (1/3)

32は、ミニチュア土器である。指押さえで整形し、底部中央を穿孔する。

35~37は、高坏である。35の坏部は、浅くて大きく開く。36・37では、坏部は深く、外反の度合いも小さい。

38~40は、甕である。39の肩部内面には、粘土紐を輪積みして指で押さえつけた痕跡が、明瞭に残っている。

41~45は、椀である。丸底に作る。器面の摩滅が激しく、調整痕はほとんど見えない。

#### 須恵器

須恵器の出土は少なく、坏を一点図示するに留めた(46)。

#### 土製品

47・48は、紡錘車である。49は投弾で、両端を一部欠失している。

#### 木製品

50は、浮子であろう。細い沈線が一条めぐる。51は、平鋸である。柄壺は、若干の傾斜を持つ。

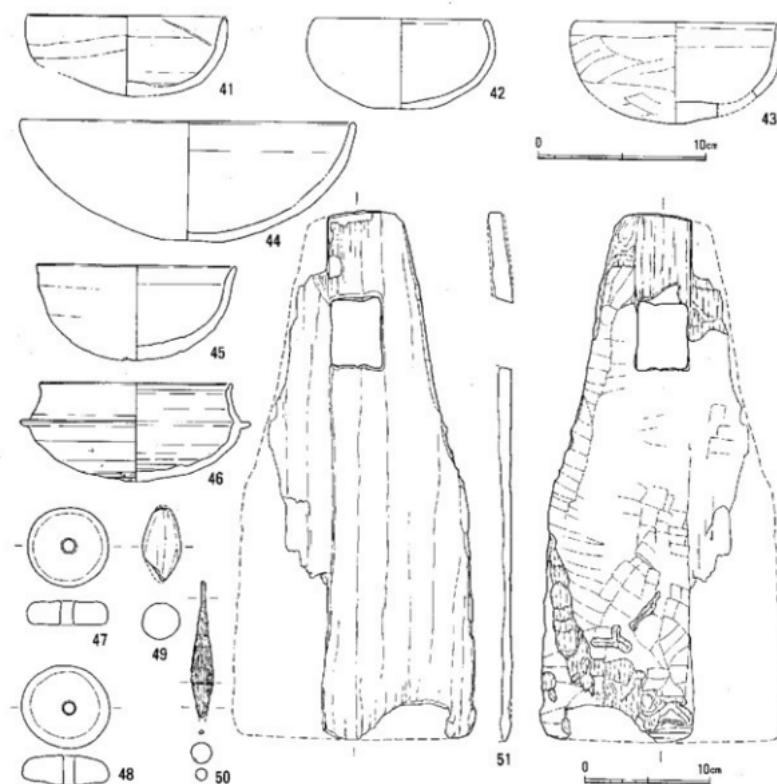


Fig.31 第1区包含層出土遺物実測図③ (1/3, 1/4)

## (2) 第2区

第2区は、調査時点での現況は、水田であった。

試掘調査では、地表下40~60cm、60~80cmの2面の水田土壌があるとされた。その指摘と、第1区遺物包含層の半ば以上で遺物が見られなかったことから、まずトレンチを設定して、調査部分の絞り込みを行った。その結果、長辺に沿って設定した第1トレンチでは、第1区の包含層に該当する粘質土層中には、まったく遺物が含まれておらず、調査不要と判断した。

一方、短辺に平行する第2トレンチでは、足跡を伴う水田面と溝を検出することができた。溝は、水田に関わる水路と思われる。ただし、部分的に洪水砂をかぶっているだけであり、トレンチの範囲内を精査するに留めた。遺物は、全く出土しなかった。この水田面は、第1区の包含層上層水田面とは、層位的に同一面であると判断されることから、11世紀後半頃に当てることができよう。

また、第1区で地山とした八女粘土上で若干の遺構が検出されたため、念のため第1トレンチの横にグリッドを設定し、八女粘土上の精査を行なった。ここでは全く遺構は見られず、調査区の拡大は断念した。



Ph.29 第2区遠景（北東より）



Ph.30 第2区全景（北より）

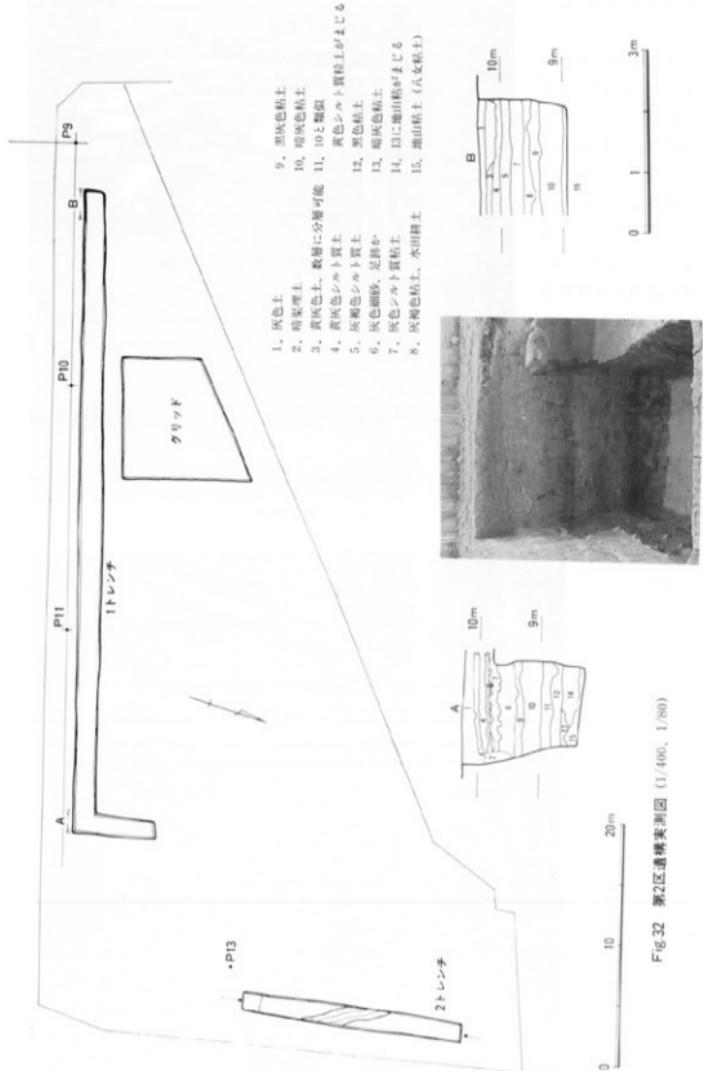


Fig.32 第2区道構実測図 (1/400, 1/800)

Ph.31 第2区1トレンチ東端土層断面 (北西→東)



Ph.32 第2区1トレンチ（南西より）



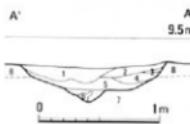
Ph.33 第2区グリッド調査区（北東より）



Ph.35 第2区2トレンチ（南より）



Ph.34 第2区2トレンチ（北より）



1. 灰色シルト質粘土
2. 灰色シルト質粘土、白色粗砂まじり
3. 濃灰色粘土
4. 灰色シルト質粘土
5. 灰色・茶色相紗  
茶色部分は鉄分による。  
底面は踏みこまれ凹凸はげしい
6. 暗灰色粘土  
踏み込みによる凹凸部分
7. 暗灰色粘土ベタベタ
8. 濃褐色粘質土、鉄分、マンガン多、水田

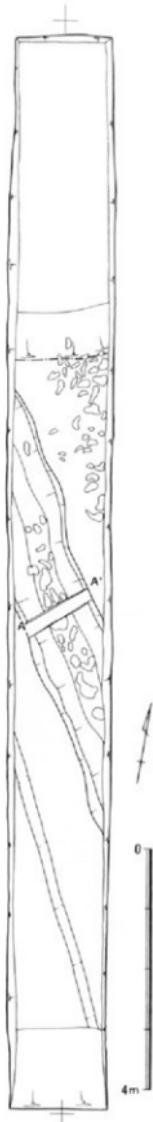


Fig.33 第2区2トレンチ遺構実測図 (1/40, 1/800)

### (3) 第3区

第3区・4区は、厚く盛土されていた。

試掘調査では、盛土を剥ぐと旧水田面が現れ、さらに現地表下1.8~2.1mで、水田面が認められたとされる。これを受け、第3区では全面を重機で掘削した。

その結果、確かに水田土壤は認められたが、洪水をたびたび繰り返しており、厚い砂の堆積中に不安定な水田土壤が残るといった様子で、水田面としては、調査不可能であった。しかし、第3区・第4区の西辺から、地山粘土が急激に落ち込む状況が確認でき、これを対象に精査を行なった。

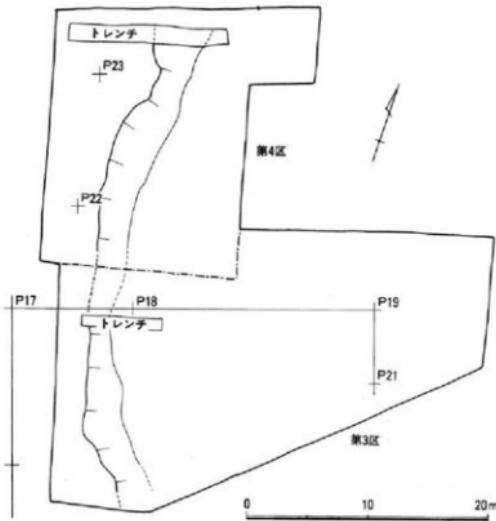


Fig.34 第3区・第4区全体図 (1/400)



Ph.36 第3区全景 (北東より)

第3区で検出した地山落ち際の状況を、Fig.35・36、Ph.42に示す。Fig.36に見るようく、落ちは河川に侵食されたもので、第1区で見た包含層上面水田の上から切り込まれている。河川は、おそらく現在の那珂古川（調査地点の東隣を流れる川）であろう。この川岸を西限として、東側にかけて暴れた河川である。

落ち際に堆積した砂層出土の遺物を、Fig.37に図示する。1は、瓦器楕である。内面はコテ当て、外面は横ナデの上に暗文状にへら磨きを加える。2は、中国の陶器瓶である。黄灰色の釉が薄くかかる。3は、土製紡錘車である。表面は丁寧に撫でて、平坦に作る。4は、滑石製の紡錘車である。裁頭円錐形に作る。5は、滑石製の石鏡である。削りで整形しているが、単位は細かく、きわめて丁寧である。外面は焼けている。

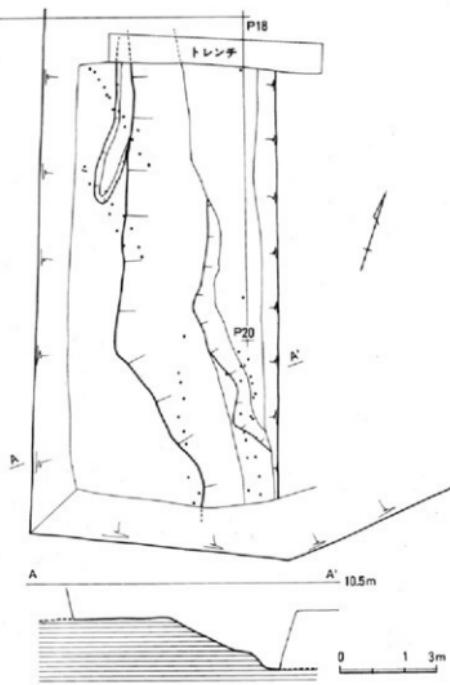
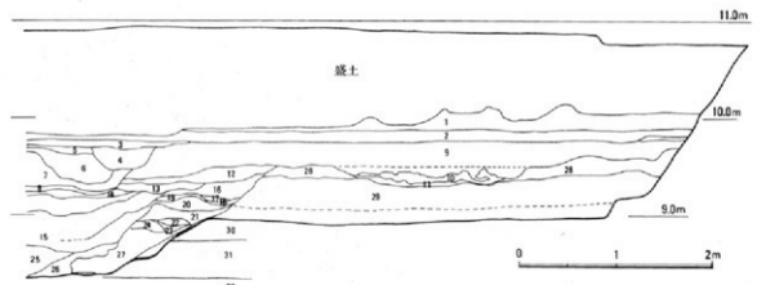


Fig.35 第3区遺構平面図 (1/150)



Ph.37 第3区河川岸（北西より）



1. 淡灰色土、旧耕作土  
 2. 灰色土  
 3. 黄褐色砂質土  
 4. 白色粗砂  
 5. 灰色砂  
 6. 粗砂、シルト  
 7. 灰色シルト性粘土  
 8. 灰色シルト、上面は鉄分のため茶化  
 9. 灰色シルト質粘土、鉄分、マンガン分の斑点多い  
 10. 濃灰色粘土  
 11. 砂、礫か  
 12. 灰色シルト質粘土、鉄斑点あり  
 13. 12と類似、細砂まじり  
 14. 灰色シルト質粘土  
 15. 粘土、細砂、粗砂の互層  
 16. 黄褐色砂質土  
 17. 灰色粘土、細砂まじり  
 18. 黄褐色粘土  
 19. 16と類似  
 20. 灰色シルト質粘土、粒砂まじり  
 21. 濃灰色粘土  
 22. 灰色シルト質粘土  
 23. 灰白色細砂  
 24. 22と同質  
 25. 白色粗砂  
 26. 濃青灰色シルト質粘土  
 27. 濃灰色粘土  
 28. 濃灰色粘土、鉄分、マンガン分多い  
 29. 濃灰色粘土、上面で鉄分、マンガン多い  
 下面で黒色粘土となる  
 30. 黑色粘土  
 31. 青灰色粘土  
 32. 紫褐色砂質土、かたくしまる

Fig.36 第3区南壁土層 (1/50)



Ph.38 第2区出土遺物

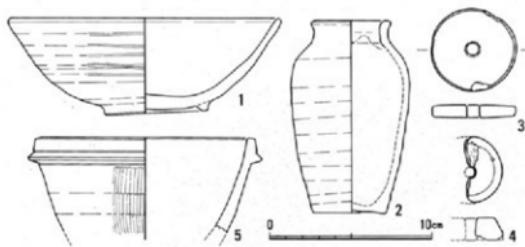


Fig.37 第2区出土遺物実測図 (1/3)



Fig.37-1



Fig.37-2

Fig.39 第2区遺物出土状況

#### (4) 第4区

第3区から連続する地山粘土層の落ちを検出した。この落ちは、河川の蛇行によって浸食された川岸であるが、第4区では河川が複雑に岸を洗い流している様が観察できた。特に、下半での垂直に近い壁面は、河川の背による抉り込みが激しかったことを物語っている。

土師器片・陶器片など出土しているが、細片が多く、ほとんど図示に耐えなかった。Fig.39-1は、瓦質土器の捏鉢である。外面は、指押さえの上から斜め刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整する。

2・3は、漆器である。2は楕で、黒漆をかける。3は、皿である。黒漆に朱で花を描く。4は、竹製品である。遺存状態は悪く、4折し3分の1ほどを失する。節を中心とした楕円形を呈し、節の両側に円孔を穿つ。腹側には、刃物による細沈線が、格子目に入る。また、腹側には一箇所溝が切られ、別の竹材が組み込まれている。用途不明である。5は、板草履である。2枚の薄い板製品からなり、これに藁を巻いて鼻緒をかけ草履とするが、この2枚が並んで藁を留めた状態で出土した。全長25.1cmを測る。6は、下駄の台である。嵌め込み式の歯は、すでに欠けていた。台面は、拇指と指の付け根の部分がくぼんでおり、使い込まれたことを示している。7は、下駄の歯である。大きく強方に開き、高



Ph.40 第4区全景（南西より）

下駄となる。歯の端部が斜めに磨り減っており、また、図の右端と左端で減り方が異なる。Bは、木簡である。極の薄板で、両側に墨書きが見られる。部分的に墨が飛んでおり、解読できていない。

第3区と第4区の出土遺物と、川の堆積砂が第1区の包含層上層水田面を切っていることから、地山の落ち廻すなわち川岸が形成されたのは、11世紀以降14世紀までの間であったことが推測できる。

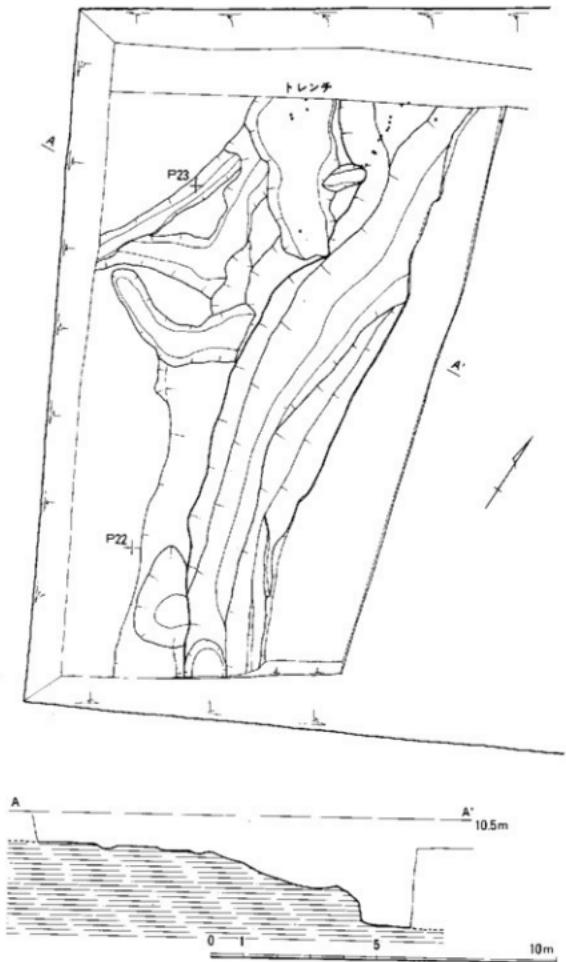


Fig.38 第4面遺構平面図 (1/150)



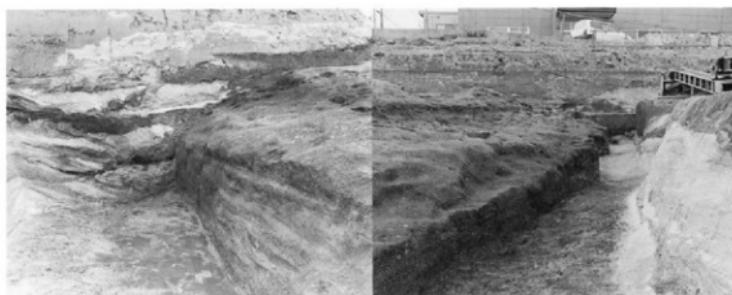
(1) 全景（東より）

(2) 全景（北より）



(3) 全景（南東より）

(4) 河川岸（南東より）



(5) 河川岸（北西より）

(6) 河川岸（南東より）

Ph.41 第3区河川岸

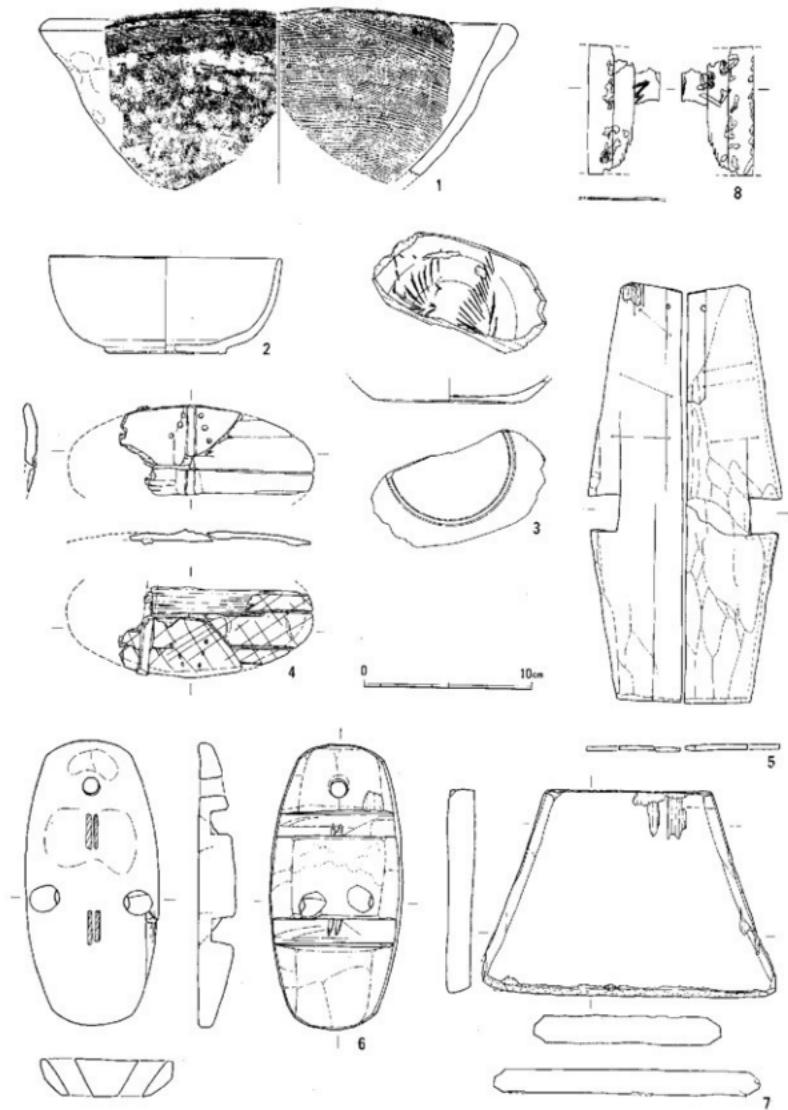
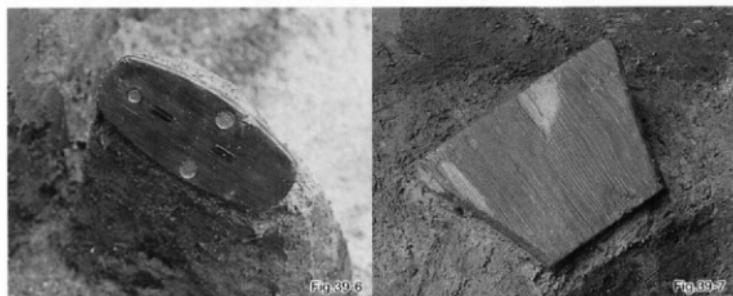
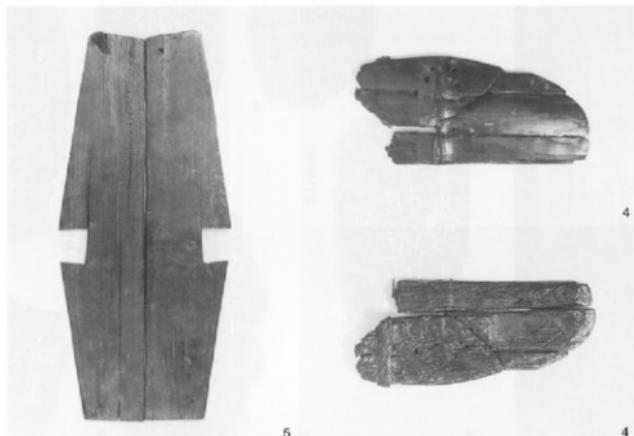


Fig.39 第4区出土遺物実測図 (1/3)



Ph.42 第4区遺物出土状況



Ph.43 第4区出土木製品

(5) 盛り土内出土墓石

第4区の盛り土層には、36基の墓石が含まれていた。隣接地の地主の話によれば、水田を埋め込んだのは、昭和47年という。このときの埋め立てに伴って、どこからか墓石が運ばれてきたものと考えられる。墓石の紀年は、最も古いもので延宝七年(1679)、新しいもので明治一三年(1880)である。宝暦元年(1751)以前のものが、29基と約80パーセントを占める。石材では花崗岩の自然石を用いたものがほとんどである。二次的に埋め込まれたもので、組成にも特に意味を求めてくるので、詳細な検討は行わない。ただし、銘文の法名には「积」を用いており、浄土真宗の墓石であることがわかる。

以下、主要なものを図示する。



Ph.44 盛り土内墓石

Fig.40 盛り土内出土墓石拓本 (1/12)

### 第三章　まとめ

最後に、内容的にはこれまで述べてきたことと重複するが、簡単なまとめを試みたい。

本調査地点は、御笠川中流域左岸の微高地および小河川の流路にある。今回の発掘調査区のすぐ東側には、那珂古川が流れているが、昭和40年の河川改修で流路が固定されるまでは、ずいぶんと水害を出したという（地元地権者のお話）。本調査の第3区・4区で地山の八女粘土層を削りて川岸を作っていたのは、那珂古川に違いない。

さて、前近代の調査地点付近を概観すると、第1区の西側には、中位段丘の高まりが伸びていた。段丘の裾から東には水田が広がる。ただし、第3区・4区あたりからは、那珂古川の水害に常にさらされる不安定な耕地であった。この景観が形成されたのは、13世紀頃であろう。

11世紀段階での水田は、さらに東まで続いている。この水田は、次に述べる古代の大溝埋没後に堆積したシルト質粘土を基盤とし、層位的には第1区・2区・3区の一部で確認できたが、第2区第2トレンチで砂をかぶっていたため検出可能であっただけで、面としての調査はできなかった。

古代前半には、中位段丘の裾に沿って、大溝が掘られていた。おおむね、8世紀前半に穿たれ、10世紀頃に埋没したものと考えられる。粗砂が厚く堆積している状況からは、まとまった水量があったことが窺われる。問題はこの大溝が、自然の流路なのか、人為的なものなのかという点であるが、この期間において、流路を若干移しながらも当初の幅の中で終始し、次第に規模を縮小させながら掘りなおされていったことから見て、その当初より人為的に掘削されたものであると考えたい。第一章4節で見たように高畠遺跡第2次・8次・9次・10次調査の大溝と一連の遺構であり、第10次調査地点の不自然な屈曲から見ても、人工的な溝を見て、大過ないものと思われる。

ここで注目しておきたいのは、井相田C遺跡第1次調査検出の大溝遺構である。井相田C遺跡第1次調査地点は、本調査地点の850mほど南に位置するが、規模・時代的に極めて類似する大溝遺構が調査されている。井相田C遺跡第1次調査の大溝は、幅8m前後、深さ1.4~2.4mで東西方向に一直線に120m分が検出された。掘削時期は8世紀前半であり、埋没は10世紀とされている。時期・規模の類似だけで、1km近くも離れた遺構を結びつけるのは早計であろうが、福岡平野の地形的な方向性から見て、井相田C遺跡第1次調査地点から西に伸びた溝が北西に転じるのは必然とも言える。結論は今後の調査に委ねるが、ひとつの可能性として、両遺跡の大溝がつながるという想定を提起しておきたい。

大溝の掘削以前には、地山である八女粘土層の上に厚く黒色粘質土層が堆積していた。この粘質土層は、中位段丘に近い側で多量の土器類を包含していた。そして、粘質土層を除去した下の八女粘土層上面において、密度は極めて低いながらも、縄文時代晚期と弥生時代中期の土坑を検出した。第1区西端付近に一部残っていた中位段丘裾の傾斜面にも同様の遺構が散見され、丘陵上から続いていたことが推測される。

ところで、この八女粘土層上面が、ほぼ水平に広がっていることに注意したい。この面上で検出した遺構は、いずれも浅く、明らかに削平を受けている。そのことと、八女粘土層上面が不自然なほど水平に広がっていることを考え合わせると、大規模な削平による整地が行われたと思われるを得ない。その時期は、包含層形成以前であり、削平の平坦さを見れば、開田によると推測される。積極的な根拠はないが、弥生時代後期から古墳時代前半期にかかる時期の水田造成と考えたい。

さて、次に本文中に触れられなかった絵馬・木簡について、説明を加えておく。

Fig.22-107は、第1区大溝中層から出土した絵馬である。上と右、それぞれ三分の一程度を欠く。

二折しており、別個に出土したため、当初は同一個体とは考えていなかったが、墨痕の判読作業に接合できることを確認した。遺存している絵は、馬の胴部である。破損している右側から墨痕を追うと、破損部位近くには、右前肢が見える。腹部の線は、緩く弧を描いており、太腹という表現にふさわしい。背の線は欠けた部分になるが、鞍と鎧が描かれている。鞍の下、ベルトで吊られたようになって墨が丸く溜まっている部分を、鎧と考えた。腰から下肢への線は、写実的である。太腹の線の向こう側に持ち上げた足が薄く認められ、右下肢について左下肢を上げている。全体として、右方向に進んでいく馬を描いている。なお、裏面には墨書は書かれていない。

108は、第1区大溝中層から出土した木簡である。緩く湾曲した縁辺部に沿って、二つを対にした円孔が見られ、折敷などの底板を転用したものと思われる。墨書は比較的鮮明ではあるが、文字とは知れても、判読できない字が多かった。文字の判読にあたっては、九州大学の坂上康俊先生のお手を煩わせた。以下、その糸文を示す。なお、便宜的に実測図の右側を表面、左側を裏面とする。

(表面)	見 □ 所 樽 和 古 参 □ □ □	(印)
	和 造 墓 □ □ □ □	(印)
(裏面)	□ □	(印)
	□ □ □ 乙 成 □ □ 事 □ □ □	(印) (印) (印)
	□ □ □	(天) (共) (五) (十)

確実には読みない部分が多く、その内容については踏み込まない。わずかに文字をひろうと、表面では何かの現営所が損壊し、修造したらしい事、裏面では、誰かの孫の乙成が解文を提出したこと、紀年が天長（5年11月）であることがわかる。なお、天長は、824年から833年であり、大溝遺構の推定年代とは矛盾しない。

このほか、文字こそ残っていないが、頭部を削りだした木札（付け札）や木製人形が出土した。たった3例ながら、付け札のまとまった出土は、本調査地点のすぐ東側に大宰府から博多湾に向かう官道が検出されたこと（第18次調査）を考え合わせれば、本調査地点の上流側に物資運送にかかる拠点（駅家？）があったことを推測することも可能だろう。

高畠遺跡の評価については、第一章4節でもふれたように、これを古代寺院とする説と那珂郡衙とする説がある。小規模な発掘調査を重ねている今の段階で結論を求めるのは、いかにも早計であるが、絵馬の出土、木製人形の出土など、寺院説には不利な状況が増しつつあるよう思う。さらに、大溝遺構自体の性格についても、これがまったく人為的なものとすれば、運河的な用途を第一に考えざるを得ないだろう。上述したように南の井相田C遺跡の大溝とつながるとでもなれば、さらに大規模な土木工事・造営主体を想定する必要が生じる。いずれにせよ、今後の発掘調査・調査報告に期待し、注目していく必要がある。

## 高畠遺跡17次

外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書11

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第676集

平成13年3月2日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大成印刷株式会社  
福岡市博多区東郡町3丁目6番62号

